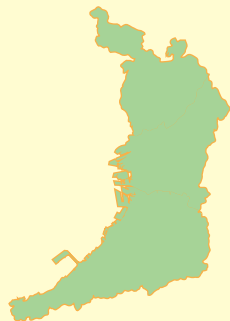


生きものから見た大阪の自然



かんきょうしりょうしゅ
大阪の環境指標種100

表紙の写真

(上段左から) ゲンジボタル、トノサマガエル、オオムラサキ、ブナ林の風景

(中段左から) カンサイタンポポ、ムクドリ、里地の風景

(下段左から) オニバス、淀川の下流の風景

裏表紙の写真

(上) モリアオガエル、(左下) オオタカ、(右下) オオクワガタ

はじめに

山林や農地、川から海までさまざまな環境がある大阪は、これらの豊かな恵みを受けて古くから経済・文化の中心として栄えてきました。しかし、急速に都市化が進んだことや、人々の生活様式が変わったことなどから、身近な環境やそこにすむ生きものが失われたり、変わりつつあります。

この本では、そんな環境の変化を反映しやすい生きものを「大阪の環境指標種」として紹介し、生きものから大阪の自然を見ていきます。

生きものの観察を続けることで、環境の変化に改めて気づかされることがあります。府内各地では、自然観察会や、生きものとその生息環境を守る保全活動など、さまざまな取り組みが行われています。これらに参加するきっかけとして、また、これらの活動の中でこの本が役立つことを期待しています。

この本での環境指標種の考え方

この本では、大阪の環境を「林」、「草地や畑」、「川」、「池や湿地」、「田んぼや水路」、「市街地」の6つに大別し、それぞれの環境の状態を反映しやすい種を中心に、身近で観察対象となりうる種も加え、「大阪の環境指標種」として100種選びました。その中で、大阪では平野部のほとんどが市街地であることから、市街地の環境指標種としては「市街地に特に多い種」だけでなく、「(他の環境に多いが)市街地でも見られる種」も選びました。

また、この本では特に「限られた環境にすむ種」「分布拡大中の種」「減りつつある種」「豊かな自然の象徴となる種」「人とのかかわりが深い種」に注目し、それぞれ生息環境ごとに紹介しています。

使い方のヒント

この本の内容は、以下の(財)三菱UFJ環境財団のホームページからもダウンロードできます。全体の複製はもちろん、必要な環境のページとフィールドノートのページだけを印刷して、観察会などの配付資料としても手軽にご利用いただけます。ぜひご利用下さい。

(財)三菱UFJ環境財団ホームページ
<http://www.h7.dion.ne.jp/~ufjef/>

I. 観察の手引き p. 1

林で観察する p. 2 / 草地や畑で観察する p. 5

川で観察する p. 7 / 池や湿地しゅうちで観察する p. 9

田んぼや水路で観察する p. 10 / 市街地で観察する p. 11

II. 大阪の環境指標種かんきょうしひひょうしゅ 100 p. 13

指標性のマークの解説かいせつ p. 14

体の大きさの表し方 p. 15

林 p. 16 / 草地や畑 p. 38 / 川 p. 60 / 池や湿地 p. 76

田んぼや水路 p. 87 / 市街地 p. 97

外来生物問題がいらいせいぶつ p. 116

III. 大阪の自然 p. 117

大阪の自然 p. 118

地域ちいきの特ちょう

北部 p. 120 / 中部 p. 122 / 南部 p. 124

資料しりょう

危険な生きものきげん p. 126

大阪の環境指標種一覽いちらん p. 127

フィールド・ノートの使い方 p. 128

観察会や保全活動ほぜんかつどうに参加する p. 130

1. 観察の手引き

^{かんきょう}環境ごとに、その成り立ちやようす、人との関わりなどを見ていきます。
環境ごとに見られる生きものを^{しょうかい}紹介していますので、II章の手引きとして使ってください。

- 林で観察する - 林の^{かんきょうしひょうしゅ}環境指標種
- 草地や畑で観察する - 草地や畑の環境指標種
- 川で観察する - 川の環境指標種
- 池や^{しつち}湿地で観察する - 池や湿地の環境指標種
- 田んぼや水路で観察する - 田んぼや水路の環境指標種
- 市街地で観察する - 市街地の環境指標種

林で観察する

雑木林 (クヌギ・コナラ・アカマツなどからなる二次林*)



春 (写真上)、冬 (写真下)

クヌギやコナラを中心に、いろいろな種類しゅるいの木からなる林です。冬に落葉する木が多く、季節によって林のようすが大きく変わります。雑木林は、昔から燃料ねんりょう（たきぎや炭）や肥料ひりょう、シイタケ栽培用のほだ木などに利用され、人の生活と深く関わりながら維持されてきました。手入れのいきとどいた雑木林の中は日が差し込んで明るく、生きものの種数しゅすうがとても豊富ほうふな林といえます。オオムラサキやオオクワガタなどの昆虫こんちゅうや、ショウジョウバカマなどの植物しょくぶつが見られます。大阪府内では北部ほくぶの北摂山系ほくせつさんけいに多くの雑木林が残っています。

雑木林の尾根すじ付近の風通しがよく栄養分に乏しいところにはアカマツの林があります。マツタケ山として管理されているところもあります。

*伐採ばっさいや自然現象によって一度失われてから再生した林を二次林とよびます。

照葉樹林 (シイ・カシ・ツバキなどからなる常緑広葉樹林)

表面がツヤツヤした葉が一年中しげっている木が多く、あたたかい地方に多い林です。林の中はうす暗く、やや湿しめり気があり、林床にはあまり草木りんしょうが生えていません。大阪府内では南部の海ぞいの地域かいに多く、北部では明治の森箕面国定公園にまとまった照葉樹林があります。



スギ・ヒノキの植林



この林は、木材を利用するために人が木を植えてつくった林です。木の種類はたいてい1、2種類に限られ、大きさもほぼそろっているのが特ちょうです。木が小さいうちは土が乾燥して、生きものはあまり多くありませんが、木が大きくなるにつれて、土が湿り気をあび、オサムシの仲間など林床の動物も見られるようになります。

ブナ林（ブナ・ミズナラなどからなる落葉広葉樹林）



ブナやミズナラなど落葉樹が主で、すずしい地方に多い林です。近畿地方では高い山にしかなく、大阪府内では妙見山、大和葛城山、金剛山、和泉葛城山の山頂付近にしかありません。カタクリなどの植物や、アカエゾゼミなどの昆虫をはじめ、ブナ林で見られない生きものも多くいます。

竹林

人里近くにあり、タケノコをとったり、竹細工などに利用されてきました。近年はあまり利用されなくなったため、手入れ不足で荒れたり、まわりの林に侵入したりしてひろがりつつあります。竹林ではキノガサタケなどのキノコや、サトキマダラヒカゲなどの昆虫が多く見られます。



かんきょうしひょうしゅ
林の環境指標種

分類	種名	雑木林	照葉樹林	スギ・ヒノキの植林	ブナ林	竹林	その他に見られる環境	ページ
ほ乳類	テン	○	○		○			16
鳥類	オオタカ	○	○	○			草地（河川敷など）、市街地（都市公園）	17
鳥類	サシバ	○	○	○				18
鳥類	カケス	○	○	○				19
昆虫類	オオゴキブリ	○	○	○				20
昆虫類	ミンミンゼミ	○	○	○				21
昆虫類	ニイニイゼミ	○	○				市街地（鎮守の森や社寺林）	22
昆虫類	ヒグラシ	○	○	○				23
昆虫類	オオオサムシ	○	○	○				24
昆虫類	オオクワガタ	○						25
昆虫類	オオセンチコガネ	○						26
昆虫類	ヒメボタル	○				○	草地、市街地（取り残された緑地）	27
昆虫類	アサギマダラ	○	○	○	○			28
昆虫類	オオムラサキ	○						29
陸産貝	クチベニマイマイ	○	○					30
種子植物	アカマツ	○						31
種子植物	ツブラジイ		○				市街地（鎮守の森や社寺林）	32
種子植物	ブナ				○			33
種子植物	コナラ	○						34
種子植物	エノキ	○					草地（河川敷など）、市街地（都市公園、鎮守の森や社寺林）	35
種子植物	ツバキ (ヤブツバキ)	○	○				市街地（鎮守の森や社寺林）	36
種子植物	ショウジョウバカマ	○						37

○は主に見られる場所

草地や畑で観察する

河川敷などの大きな草地

主に河川敷に広がる大きな草地をさします。草地は放っておくとやがて林になるので、たいていは人が草を刈り管理していますが、中には川のはんらなどで自然に維持されている草地もあります。

水ぎわではヨシなど水を好む植物が見られ、一段高くなって水が来ないところではオギなどが、さらに土手になるとススキやチガヤなど乾いたところを好む植物が見られる、というように同じ河川敷でもわずかな環境のちがいによって、すむ生きものも変わります。



山ぎわや畑などの小さな草地



主に農耕地のまわりなど人が定期的に草を刈り管理している小さな草地をさします。かつては「ひろっぱ」「はらっぱ」などとよばれ、地域に特ちょう的な草本をはじめとする多くの生きものがすむほか、子どもにとってよい遊び場所になっていました。しかし、このような草地は今では少なくなっていました。

山ぎわ（林のへり）の草地はふつつ、規模はあまり大きくありませんが、河川敷よりも生きものの種類が豊富です。

まちでは、人家や畑のまわりにわずかな草地がありますが、いずれも単純な環境で、生きものの種数は少なく、荒れ地などを好む種類が見られます。

かんきょうしひょうしゅ
 草地や畑の環境指標種

分類	種名	河川敷など	山ぎわや畑など	その他に見られる環境	ページ
ほ乳類	カヤネズミ	○	○		38
鳥類	アマサギ		○	田んぼ	39
鳥類	キジ	○	○	田んぼ	40
鳥類	ケリ	○	○	田んぼ	41
鳥類	ヒバリ	○	○		42
鳥類	オオヨシキリ	○			43
鳥類	セッカ	○	○	市街地（うめ立て地）	44
昆虫類	オオカマキリ	○	○		45
昆虫類	エンマコオロギ	○	○	市街地 （住宅地、都市公園）	46
昆虫類	スズムシ	○			47
昆虫類	マツムシ	○	○	市街地（うめ立て地）	48
昆虫類	キリギリス	○	○		49
昆虫類	トノサマバッタ	○		市街地（うめ立て地）	50
昆虫類	キアゲハ	○	○	市街地 （住宅地、都市公園）	51
昆虫類	ジャノメチョウ	○	○		52
シダ植物	ワラビ	○	○		53
シダ植物	クサソテツ	○	○		54
種子植物	ツリガネニンジン		○		55
種子植物	ヒガンバナ		○	田んぼ（あぜなど）	56
種子植物	チガヤ	○	○		57
種子植物	ススキ	○	○	市街地（都市公園）	58
種子植物	ヨシ	○		池（平地のため池）、 湿地	59

○は主に見られる場所

川で観察する

上流（溪流）

山地を流れる上流には、大きな岩がたくさんあって、水量は少なくても流れが速く、夏でも水温が低いのが特ちょうです。上流に特有の生きものがすんでいて、カゲロウやカワゲラの仲間などの水生昆虫やサワガニが多く、地域によってはアマゴやタカハヤなどの魚が見られることもあります。



中流



主に里地の平たんな場所を流れる中流は、流れの速さや川底のようすなどが場所によってさまざまです。魚の種類はあまり多くありませんが、オイカワやカワムツなどが見られ、ゲンジボタルが多く見られるのもこのような場所です。

下流

川幅が広く、流れはゆるやかです。市街地を流れているため、堰や護岸など人の手が多く加えられています。コイやフナせせの仲間などの魚や、シジミの仲間こがねの二枚貝など、ゆるやかな流れにすむ種類が見られます。

淀川よどがわの下流には広いヨシ原があり、オオヨシキリなどの鳥や、カヤネズミなど多くの生きものがすんでいます（この本ではヨシ原しよしかいの生きものを草地のページで紹介しています）。



河口



海に近く、海水が混じる汽水域です。淀川のように大きな川では引き潮のとき、干潟が現れます。干潟にはカニの仲間がすむ他、シギやチドリの仲間などの水鳥が集まる場所としても重要です。近年はうめ立てなどで自然の干潟は少なくなっていました。代わりに人工干潟がつくられているところもあります。

川^{かんきょうしひょうしゅ}の環境指標種

分類	種名	上流(渓流池)	中流	下流	河口	その他に見られる環境	ページ
鳥類	イカルチドリ		○				60
鳥類	チュウシャクシギ			○	○	湿地、田んぼ	61
鳥類	カワセミ		○	○		池や湿地(山の小さな池、平地のため池)、市街地(都市公園)	62
鳥類	キセキレイ	○	○			池(山の小さな池)、田んぼ	63
両生類	オオサンショウウオ	○	○				64
両生類	カジカガエル	○					65
魚類	ギンブナ		○	○		池(平地のため池)	66
魚類	カワムツ	○	○				67
魚類	シマドジョウ		○	○			68
甲殻類	スジエビ		○	○		池(平地のため池)	69
甲殻類	サワガニ	○					70
甲殻類	モクズガニ		○	○	○		71
昆虫類	ハグロトンボ		○				72
昆虫類	ゲンジボタル	○	○				73
淡水貝	カワニナ	○	○				74
淡水貝	マシジミ		○	○			75

○は主に見られる場所

池や湿地で観察する

山の小さな池

水がきれいで浅く、岸が土のゆるやかな斜面になっている池では水生植物が多く見られます。チョウトンボやクワゲンゴロウがすみ、モリアオガエルが産卵するのもこのような池です。



平地のため池



コンクリートなどで護岸されている池では、生きものはあまり多くありません。ブルーギルなど外来種の魚が多いのも特ちょうです。冬の間は渡ってきたカモの仲間など水鳥がよく利用します。

湿地

大阪府内では少なく、能勢町の地黄湿地や和泉市の信太山湿地が代表的です。湿地のみをすみかとする希少な生きものがすみ、保全活動が行われています。



池や湿地の環境指標種

○は主に見られる場所

分類	種名	山の小さな池	平地のため池	湿地	その他に見られる環境	ページ
鳥類	カイツブリ		○		川（中流、下流）	76
鳥類	カワウ		○		川（下流、河口）	77
は虫類	ニホンイシガメ	○	○		川（上流、中流）	78
両生類	モリアオガエル	○		○	林（雑木林）	79
昆虫類	ギンヤンマ		○		市街地（都市公園）	80
昆虫類	チョウトンボ	○	○		田んぼや水路	81
昆虫類	ナニワトンボ	○				82
種子植物	ジュンサイ	○				83
種子植物	オニバス		○			84
種子植物	モウセンゴケ			○		85
種子植物	ヒシ		○			86

田んぼや水路で観察する

田んぼや水路

田んぼや水路は、人が稲作いぬさくするためにつくり、維持してきた環境です。かつての田んぼは地形いしにあわせた形で、それにあわせた耕作法かんきょうがおこなわれ、田んぼに水を引く水路も変化に富んでいました。そのような場所は、ドジョウやメダカなどの魚をはじめ、水生昆虫、カエルの仲間、水生植物など、多くの生きものすみかでした。しかし、今では耕うん機など大きな機械で作業して効率を上げるために圃場整備が行われ、大型機械が通りやすい道路や、耕しやすい田んぼの形につくり変えられたところがほとんどです。また、水路もコンクリートで固められることが多くなりました。そのため単純な環境が多くなり、以前はふつうに見られた田んぼや水路の生きものは、なかなか見られなくなりました。多くはありませんが、今でも北部や南部の山あいには、昔のすがたの田んぼや水路が残っています。このような場所が観察のポイントです。



田んぼや水路の環境指標種

分類	種名	田んぼや水路	その他に見られる環境	ページ
は虫類	ヤマカガシ	○	林（雑木林）	87
両生類	アカハライモリ	○	池（山の小さな池、平地のため池）、湿地	88
両生類	ニホンアカガエル	○	湿地	89
両生類	トノサマガエル	○	湿地	90
魚類	タモロコ	○	川（中流、下流）、池（平地のため池）	91
魚類	メダカ	○	川（中流、下流）、池（平地のため池）	92
昆虫類	アキアカネ	○	夏の間は山頂の林や草地	93
昆虫類	タイコウチ	○	川（中流、下流）、池（山の小さな池）、湿地	94
昆虫類	クロゲンゴロウ	○	池（山の小さな池）、湿地	95
シダ植物	ミズワラビ	○		96

○は主に見られる場所

市街地で観察する

住宅地やうめ立て地など



住宅地やうめ立て地などは、林や草地などと比べると単純な環境で、生きものの種類が少なく、自然が豊かとはいえません。しかし、このような場所にすんでいる生きものは、環境の変化にうまく生活を合わせたり、乾燥した裸地にいち早く入りこむなど、たくましい性質をもっています。中にはスズメやツバメ、ニホンヤモリなど、人間がすんでいる場所をむしろ好んで利用する生きものもいます。

都市公園

都市公園にはまとまった広さの緑があり、たいていはいろいろな植物が植えられています。中には以前からあった林を取りこんで残しているところもあります。また、都市公園の多くには池があり、越冬するために渡ってきたカモ類などの水鳥が見られます。また、大阪を通過する渡り鳥にとって都市公園の緑はよい休けい場所となるため、思わぬ珍鳥が見られることもあります。



鎮守の森や社寺林



シイやカシ、ツバキなどが残されたり植えられたりして、小さな照葉樹林ともいえます。神聖な場所として昔から木を切らずに大切に守られてきたので、大木が多いのが特ちょうです。林の広さや場所にもよりますが、都市公園の緑とはまたちがった生きものが見られます。アオバズクのように木の洞を利用する鳥が見られることもあります。

市街地の環境指標種 かんきょうしひょうしゅ

分類	種名	住宅地や うめ立て地など	都市公園	鎮守の森や社寺林	その他に 見られる環境	ページ
ほ乳類	アブラコウモリ	○	○			97
鳥類	コアシサシ	○			川（下流、中流）、 池（平地のため池）	98
鳥類	キジバト	○	○	○	林（雑木林、照葉樹林）	99
鳥類	コゲラ		○	○	林（雑木林、照葉樹林、 ブナ林）	100
鳥類	ツバメ	○	○		草地（河川敷など）	101
鳥類	シジユウカラ		○	○	林（雑木林）	102
鳥類	メジロ	○	○	○	林（雑木林、照葉樹林）	103
鳥類	スズメ	○	○	○	草地（河川敷、畑など）	104
鳥類	ムクドリ	○	○		草地（畑など）	105
は虫類	ニホンヤモリ	○	○	○		106
昆虫類	ウスバキトンボ	○	○		池や湿地（平地のため池、 湿地）、田んぼや水路	107
昆虫類	カネタタキ	○	○	○	林（雑木林、照葉樹林）	108
昆虫類	クマゼミ	○	○		林（雑木林、照葉樹林）	109
昆虫類	ナガサキアゲハ	○	○		草地（畑など）	110
昆虫類	ツマグロヒョウモン	○	○		草地（河川敷、畑など）	111
種子植物	クスノキ	○	○	○	林（雑木林、照葉樹林）	112
種子植物	ナズナ	○	○		草地（畑など）	113
種子植物	スミレ	○			草地（畑など）	114
種子植物	カンサイタンポポ	○	○		草地（畑など）	115

○は主に見られる場所

II. 大阪の環境指標種 100

環境ごとに特ちょう的な生きものを 100 種紹介しています。

表示の見方

●右のインデックスでは、生きものが主に見られる環境をカラーで、その他に見られる環境をグレーで示しています。



●左の図では、生きものが見られる環境を林～市街地の区分とは別に、人の利用から見た区分「山」「里地」「まち」で表しています。例えば、この図では山の方で見られる生きものであることを示しています。

★～★★★★

●星印で生きものを見つける難易度を表しています。星印の数が多いほど、見つけるのがむずかしいことを示しています。

【鳥類の区分】

留鳥：大阪府内で一年中見られる鳥。

夏鳥：春に南の国や地方から渡ってきて大阪府内で繁殖し、秋には南へ渡って冬をこす鳥。

冬鳥：秋に北の国や地方から渡ってきて大阪府内で冬をこし、春には北へ渡って繁殖する鳥。

旅鳥：春と秋の渡りの途中に大阪府内に立ち寄る鳥。

【植物の区分】

一年草：タネから発芽後、一年以内に一生を終え、タネを残して枯れる草。






多年草：タネから発芽後、一生が複数年にわたる草。

常緑樹：一年中葉がしげっている木。

落葉樹：冬に落葉する木。

指標性のマークの解説

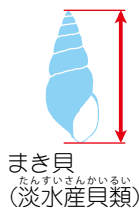
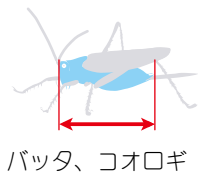
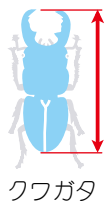
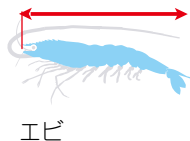
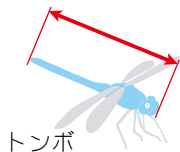
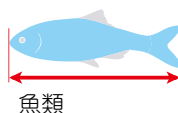
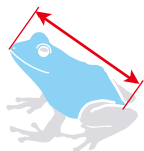
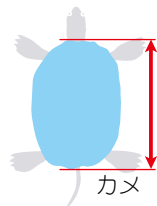
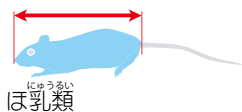
特に環境のようすをあらわす生きものには次の指標性のマークをつけています。

マーク	解説
	<p>特定の場所にしかすむことができないため、環境の変化に弱い生きものを中心に選びました。湿地のように、失われつつある環境をすみかにしている種や、うめ立てによってできた裸地のように、一時的で長続きしない環境をすみかにしている種にこのマークをつけています。</p>
	<p>以前と比べて大阪府内で分布を広げている生きものを選びました。以前は大阪では見られなかった南のあたたかい地方に多い種や、近年大阪で繁殖するようになった種、林から市街地に進出してきた種にこのマークをつけています。</p>
	<p>絶滅のおそれがある種などを取りまとめたレッドデータブック*に取りあげられている生きものや、地元の観察などで減ってきたといわれている生きものを選びました。環境の変化ですみかが失われて減ってきた種や、天敵となる外来種に捕食されて減っている種、よく似た環境にすむ外来種に追いやられている種、近縁の外来種と雑種ができて純粋な種が減っている種にこのマークをつけています。</p>
	<p>その種がいることを通して、その場所に豊かな自然があることが分かる生きものを選びました。生息するためにはたくさんのエサとなる生きものを必要とする種や、人はなれた山おくを主なすみかとしている種にこのマークをつけています。</p>
	<p>里地、里山で生きてきた生きものを中心に選びました。昔から人の生活によく利用されてきた種や人が草刈りなどの管理をしている場所にすむ種にこのマークをつけています。</p>

* 環境省レッドデータブック・レッドリスト、大阪府レッドデータブック、近畿地区鳥類レッドデータブック 絶滅危惧種判定システムの開発（山岸 哲 監修、江崎保男・和田 岳 編著）、改訂・近畿地方の保護上重要な植物 -レッドデータブック近畿 2001-（レッドデータブック近畿研究会 編著）を参考にしています。

体の大きさの表し方

この本では、体の大きさを下図のように表しています。





テン イタチ科

大きさ：45cm 尾の長さ：19cm



かな自然の象徴となる種

主に山林にすむイタチの仲間で、木によく登ります。^{ざっしょくせい}雑食性で、ネズミや小鳥、カエル、^{こんちゅう}昆虫などの他、アケビやヤマグワなどの木の実もよく食べます。体はニホンイタチやチョウセンイタチよりも大きく、ネコくらいです。地方によっては夏毛と冬毛の色がちがいますが、大阪では一年中同じような^{かつしよく}褐色です（これをスステンとよび、冬毛が黄色になる北日本のテンをキテンとよんで区別することがあります）。テンがすむには小動物や木の実が多い、豊かな自然が残る山林が必要です。



テンの糞。糞のようすは食べたものによってちがいますが、ニホンイタチやチョウセンイタチよりも大きく、植物のタネなどを多く^{ふく}含んでいます。

●さがすポイント ★★★

^{やこうせい}夜行性で林の中にすんでいるため、すがたはなかなか見られません。しかしテンにはなわばりを示すために^{ごん}糞を岩の上など目立つ場所にする^{しやうせい}習性があります。足あとや糞なら登山道などでもけっこう見つかるものです。

●よく似た種類

ニホンイタチ：テンよりずっと小さい。
 チョウセンイタチ：ニホンイタチより大きく、テンより小さい。平地に多い。



オオタカ タカ科



りつつある種

大きさ：オス 50 cm メス 56 cm りゅうちょう 留鳥

かんきょうしょう 環境省：準絶滅危惧種 じんぎ 近畿：準絶滅危惧種

大阪府：絶滅危惧Ⅱ類 とよ 豊かな自然の象徴となる種

主に山林にすみますが、最近では市街地でも見られるようになってきました。市街地では、ドバトをエサにしているようです。しかし、オオタカの数はまだまだ少ないのが現状です。2005年の調査で、大阪府内に約50つがい（オスとメスのペア）のオオタカがいることが分かりましたが、この数は他の鳥と比べてとても少なく、絶滅のおそれがある種などとして国や大阪府によって指定され、保護の対象になっています。オオタカは生きもの同士の食う・食われるの関係（食物連鎖といいます）の頂点にいる動物です。オオタカがすんでいたら、その場所には、エサとなる小動物や、そのまたエサとなる生きものもたくさんいて、自然のサイクルがうまく成り立っている証拠です。

●さがすポイント ★★★

数が少ないのでいつでも見られるわけではありません。カラスの群れとよく空中戦をするので、山でカラスの群れがさわぐところをさがしてみましょう。大きさはカラスと同じくらいです。

タカの仲間がよく見られるのは里山で、地面があたたかくなり上昇気流ができる午前10時ごろと、ねぐらに帰る午

後3時ごろによく上空を飛びます。また、冬には農耕地や河川敷などで多くのタカの仲間が見られるので、種類と生息場所の関係を観察してみましょう。

●よく似た種類

ハイタカ：オオタカより小さく、ハト大。



サシバ タカ科



りつつある種

大きさ：49 cm なつどり 夏鳥 (3～10月)

かんきょうしょう 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 きんき 近畿：絶滅危惧種 しほんげつめつ 大阪府：準絶滅危惧



かな自然の象徴となる種

主に低い山の林にすむタカの仲間で、バツヤやヘビ、カエルなどを食べます。春になると南の国から日本に来て繁殖します。2000年ごろより前には、大阪府内の里山でふつうに繁殖していましたが、最近ではほとんど見られなくなりました。大阪府内でのつがいの数は、おそらくオオタカよりも少ないでしょう。これは、里山や田んぼの減少と農業の影響などで、エサとなる生きものが少なくなりました。また、原因が原因かもしれません。サシバはオオタカと同じく、食物連鎖の頂点にいる動物です。サシバが繁殖している場所は、エサとなる生きものをはじめ、多くの生きものがすむ豊かな自然が残っている環境といえます。

●さがすポイント ★★★

数が少ないので繁殖期にみつけるのは困難ですが、秋の渡り(9月下旬から10月上旬)には他の地方で繁殖した多くのサシバが大阪を通過するので観察しやすくなります。風が山の斜面に当たり上昇気流がよく発生する場所をポイントに、群れで飛んでいきます。「ピックイー」と鳴く声がし

たら、サシバがいると分かります。各地で観察会が開かれているので参加してみるとよいでしょう。

●よく似た種類

特になし。



カケス カラス科

大きさ：33 cm リゅうちょう 留鳥

豊 かな自然の象徴となる種

ふだんは山あくの森林にすんでいるカラスの仲間で、里山の林あたりまでは下りて来ますが、林の外にはあまり出ません。大阪府内では一年中見られる留鳥ですが、冬には北の寒い地方から南のあたたかい地方へ移動するために大阪を通過するものもいます。雑食性で、昆虫やドングリなどを食べます。秋にドングリを木の穴や地中にかくし、冬の食料としてたくわえておく習性があります。冬にカケスが食べたドングリは、春に芽を出し、やがて木が育つことがあります。このことから、カケスが林をつくるともいわれています。

カケスがすむには山あくの豊かな自然が残る環境が必要です。



カケスの翼には青くてきれいな色の羽根があります。

●さがすポイント ★★

林の中ではなかなかさがすが見えませんが、「ジェー」と鳴く声でカケスがいると分かります。冬になると、まれに平地に下りてきて、木が多く自然を感じさせる公園などで見られることがあります。



オオゴキブリ オオゴキブリ科

大きさ：4～4.3cm 観察時期：一年中



かな自然の象徴となる種

雑木林や照葉樹林内の朽ち木をはじめ、アカマツやスギなどの立ち枯れの中にすんでいて、朽ち木を食べます。オオゴキブリがすむには、よく湿った林が必要で、かつては長居公園の臨南寺の林のように、平地の社寺林にもすんでいました。あたたかい地方に多い昆虫ですが、高野山の針葉樹林や青森県のブナ林にもいるので、わりと幅広い環境にすむことができる昆虫なのでしょう。よくさがせば、意外とちかかくの林でも見つかります。

●家族生活

成虫と幼虫がいっしょにくらしています。これは、このゴキブリは朽ち木を消化するのに必要な細菌を腸内にすまわせている（共生といいます）ため、親から子へとこの細菌を受けわたす必要があるからです（同じようなことが木材を食べるシロアリにもあります）。成虫にははねがありますが、木の中で動くのですり切れていることが多く、幼虫にははねがありません。

●さがすポイント ★★

照葉樹林や社寺林などのうす暗い林で、朽ち木や立ち枯れた木の中や下をさがしてみましょう。林内を歩いていることもあります。

●よく似た種類

九州以南にはクチゴキブリなど似たゴキブリがいますが、大阪府内（本州）には似たゴキブリはいません。



ミンミンゼミ セミ科

大きさ：3.3～3.6cm 観察時期：7～9月

特ちょうのある鳴き声でおなじみのセミです。主に低い山地の湿った林にすんでいます。大阪府内では、箕面のような低い山に多く、そのような場所では長い期間鳴き声を聞くことができます。まれに市街地へ成虫が飛んできて、鳴き声が聞かれることがあります。成虫はいろいろな木にいますが、中でもケヤキ、サクラ、スギなどを好みます。オスは「鳴きうつり」といって、一カ所で鳴かず、しばらく鳴くと他の木へ移動して鳴きます。

ミンミンゼミは近畿地方では山に多くいますが、関東地方では市街地でふつうに見られます。

●セミの一生

セミは、地中ですごす幼虫の期間が長いので、その一生（生活史といいますが）は多くの種類で分かっています。そんな中、ミンミンゼミやアブラゼミは数少ない生活史が分かっている種類で、仙台市でのミンミンゼミの観察では羽化するまで7年もかかったそうです。

●さがすポイント ★

いれば「ミンミンゼミ」と鳴く声で分かります。

●よく似た種類

大きさと緑色のもように注意すれば、他のセミとまちがうことはありません。



ニイニゼミ セミ科

大きさ：2～2.4cm 観察時期：6～9月



りつつある種

サクラなどの木が多い低い山地や社寺林、果樹園などに多いセミです。昔はアブラゼミとともに市街地にもたくさんいて、木の低いところにとまって鳴くので、かんたんにつかまえることができました。1970年代までは大阪城公園でもふつうに見られたほどです。しかし、最近では市街地で激減しています。少なくなった原因は、市街地の気温が高くなったことによる乾燥化などが大きいと思われていますが、はっきりしていません。

●聞き取りにくい鳴き声

ニイニゼミは他の種類のセミに比べて生息情報が少ないセミです。これはニイニゼミの鳴き声がとても高音で、人間の耳では聞き取りにくいことが関係しているかもしれません。このような高音は年齢を重ねるほど聞き取りにくくなります。他に、チツゼミの鳴き声（ニイニゼミよりもっと高音で超音波にちかい）は、さらに聞き取りにくくなります。

●よく似た種類 特になし。

●さがすポイント ★★

果樹園やサクラの木が多い場所をさがしてみましよう。成虫は小さくて平たく横幅があり、ぬげらは、全体が泥におおわれているので、かんたんに見分けることができます。



ニイニゼミのぬげら



ヒグラシ セミ科

大きさ：オス2.9～3.8cm メス2.1～2.5cm 観察時期：6～9月

和歌や俳句ではもっとも有名なセミです。「カナカナカナ・・・」と情緒のある鳴き声が心地よいのでしょうか。ただしこれは遠くから聞いた場合で、近くで聞くとうるさいほどです。スギやヒノキの植林のような湿った林を好みます。

主に朝や夕方のうす暗いときに合唱しますが、くもりの日にはいつでも鳴きますし、うす暗い林内では昼でも鳴くことがあります。セミは種類によって鳴く時間がだいたい決まっています、ヒグラシは朝と夕方、クマゼミは早朝から午前中、などというように鳴き分けています。

●セミにつく白い虫

ヒグラシやミンミンゼミなどの成虫には、しばしばセミヤドリガというガの幼虫が、ハネのつけねなどにとりついています(寄生といえます)。白くて大きな幼虫なので、目立ちます。

●さがすポイント ★

いれば鳴き声ですぐ分かります。山道を歩いていくと、地面近くから飛び立つことも多いので、気をつけましょう。

●よく似た種類

ハルゼミ、ヒメハルゼミ：どちらも前ばねに1列のもようと、腹部のつけねの横に小さな突起があり、見られる時期はかなり早い。



オオオサムシ オサムシ科

大きさ：2.3～3.8cm 観察時期：主に春～夏



かな自然の象徴となる種

雑木林や照葉樹林、スギやヒノキの植林にすむ大型の肉食性の昆虫です。オサムシの仲間のほとんどは、後ろばねが退化して、飛ぶことができません。もっぱら地表を歩き回り、他の昆虫やミミズなどをつかまえて食べます。飛ぶことができる昆虫に比べて長距離を移動することができないため、すみかとなる環境が失われると生きていくことがおぼろしい種類です。このように、飛ぶことができない肉食性のオオオサムシがいるということは、たくさんのエサとなる生きものがすんでいる証拠です。

●さがすポイント ★★★

春から夏には林道などで地表を歩いているのをさがしてみましょう。みぞに落ちていることもあります。また、オサムシの仲間は、秋になると成虫が土の中にもぐって冬ごしするので、冬に山道のわきのがけになった所などの土をくずすと、見つけることができます（注意：土をくずすときは登山道などみんなのめいわくになる場所はさげましょう）。

●よく似た種類

マイマイカブリ：胸が細長くなって首のようになり、マイマイ（カタツムリ）を食べるのに適した体をしている。日本にだけすんでいる種類（日本固有種）。



マイマイカブリ



オオクワガタ クワガタムシ科



りつつある種

大きさ：オス2.7～7.6cm メス3.4～4.3cm 観察時期：6～9月

環境省：準絶滅危惧 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類

かな自然の象徴となる種

クヌギ、コナラなどの多い雑木林にすんでいます。幼虫は朽ち木や枯れ木の中で、腐りかけた木材を食べて育ちます。成虫は昼間は木の洞などにひそんでいて、夜になると活動し、樹液に集まります。昆虫の中では長生きする方で、飼育すると成虫で2～3年生きます。オオクワガタは、クワガタの仲間ではもともと数の少ない種類でしたが、近年ではすみかとなる雑木林が宅地開発で失われてしまったり、ペットとして人気があり高い値段がつくので乱獲されたりして、ますます減ってしまいました。大阪府内では雑木林が多く残る北部の山地に、少ないながらもすんでいます。

●さがすポイント ★★★

北部の山地には、昔の人がたきぎや炭にするためにくり返し枝を切って利用したクヌギ(台場クヌギとよびます)が残っています。根もと近くの手が太くなって複雑な形をした台場クヌギには穴や洞が多く、オオクワガタのかくれ場所となっています。ただし、数が少ない種類なので、おやみな採集はひかえましょう。

●よく似た種類

ヒラタクワガタ：大きさ オス3.0～7.1cm、メス3.0～4.1cm。クヌギ、コナラの多い雑木林にすみ、夜間に樹液に来る。オスの大あごの先の方にはノコギリ状のとげが続く。



オオセンチコガネ センチコガネ科

大きさ：1.6～2.2cm 観察時期 4～10月



かな自然の象徴となる種

シカなど大型のほ乳類にゅうるいがすむ草原や林で見られる、コガネムシの仲間です。林の中を飛びまわって、大型のほ乳類の糞ふんを見つけて食べます。また、親は土に穴を掘って大型のほ乳類の糞をうめ、そこに卵を産みつけます。ふ化した幼虫は糞の中で育ちます。このように糞を主なエサとしているコガネムシの仲間を「糞虫ふんちゅう」とよびます。糞虫は、いわば林のそうじやさんです。オオセンチコガネがすんでいることは、そこに大型ほ乳類がすむ環境があるということです。

●オオセンチコガネの色

体の色は、地方によって大きちがいます。大阪府では、ふつうむらさきがかった赤銅色せきどうしよくをしています。京都府きょうとや滋賀県しがけんの一部では緑色、奈良県ならけんや和歌山県わかやまけんではるり色をしています。



緑色のオオセンチコガネ（滋賀県）

●さがすポイント ★

大阪府内ではシカやサルがすむ北部の山に多く見られます。シカやサルの糞を見つけたら、糞虫が集まっていないかさがしてみましよう。

●よく似た種類

センチコガネ：オオセンチコガネより少し細長く小型で、体の光沢こうたくがにぶい。北部だけでなく、中部、南部の山のちかくでも見られる。



ヒメボタル ホタル科

大きさ：オス0.9cm メス0.7cm 観察時期：5月中旬～8月
ちゅうじゆん
 大阪府：準絶滅危惧

限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

豊 かな自然の象徴となる種

主に林にすむホタルの仲間で、生息には幼虫のエサとなる陸貝せいそくが多い湿った環境しめが必要です。低地の人家のまわりから高い山までさまざまな林で見られますが、幅広い環境はばひろにすむわりに、ひとつひとつの生息域は小さく限られています。大阪府内でも北部や南部の社寺林や竹林、人家のまわりのやぶなどにすんでいることが知られていますが、そのすみかはせまく、なぜかバラバラに散らばっています。さらにメスは、はねが退化して飛ぶことができないため、なかなか分布を広げることができません。このようなせまいすみかは不安定で失われやすく、ヒメボタルは減りつつあります。ヒメボタルがいたら、そこは昔からよい自然環境が残っているところといえます。

●幼虫の生活

幼虫は陸上で生活します。幼虫は湿った林ややぶの土の中にいて、ときどき地上に出ては、オカチョウジガイやトクサオカチョウジガイ、小さなカタツムリやキセルガイなどの陸貝を食べます。

●よく似た種類

ヘイケボタル：主に田んぼのまわりにすむ。胸部背面のもようはたての直線 (p73)。

●さがすポイント ★★

成虫は風のない夜8～9時ごろによく光ります。黄色くピカッ、ピカッと間を置いてフラッシュのように光るのが特ちょうです。オスは飛びながら光り、メスは地上や草の上で光ります（北海道～九州で、成虫がよく光るホタルは、ゲンジ、ヘイケ、ヒメの3種のみ）。成虫の胸部背面のもようは多くが逆三角形です。





アサギマダラ マダラチョウ科

大きさ：5.5～6cm 観察時期：4月下旬～10月

春には北へ、秋には南へと渡りをするチョウとして有名です。200 km以上の距離を移動し、中には2400 kmを移動した例も報告されています。マーキング調査*によると、大阪府内でつかまえてマーキングして放したチョウが、鹿児島県や沖縄県などでふたたびつかまえています。国内では沖縄県から北海道まで記録があり、マダラチョウの仲間では最も北にまで分布するチョウです。オスが成熟する（繁殖できるようになる）には、ヒヨドリバナやスナビキソウなどに含まれている特定の化学物質（ピロリジジン・アルカロイド）が必要のため、オスはこれらの植物に強く引きつけられて、蜜を吸います。

●幼虫の生活

幼虫はサクララン、キジョラン、オオカモメヅルなどがガイモ科の植物を食べます。ガイモ科の植物には、アルカロイドと総称される化学物質（毒）が含まれていて、幼虫はこれを体内にためこむことで、鳥などの敵から身を守っているといわれています。

*マーキング調査：はねにつかまえた日づけや地名などを書いて放し、渡りを調べています。

●さがすポイント ★★

季節によって見られる場所がちがいで、春や秋は主に低い山で、夏は高い山（1000 m以上）で見られます。大阪府内では主に林のへりで見られますが、うす暗い林の中や、まれに市街地で見られることもあります。府内で行われているマーキング調査に参加してみましょう。

●よく似た種類
特になし。



オオムラサキ タテハチョウ科

大きさ：4.5～6cm 観察時期：6月中旬～8月末
ちゅうじゆん
けんさつしき

環境省：準絶滅危惧、大阪府：準絶滅危惧

減 りつつある種

豊 かな自然の象徴となる種

雑木林そうきばやしとかかわりの深い大型のタテハチョウです。大阪府内の山に広くすんでいます、中でも雑木林が多く残る北部の山にやや多くすんでいます。しかし、近年は雑木林が手入れ不足で荒れてしまったり、開発で失われてしまったりしてだんだんすお環境が減り、オオムラサキはなかなか見られなくなりました。オオムラサキがすんでいる林は、昔ながらの里山の環境が保たれているといえます。エノキとクヌギが生えている雑木林はどこにでもあります、あるていどの広さと、よりよい自然が残されているところでないと、オオムラサキは見られません。

●さがすポイント ★★

成虫はクヌギやヤナギじゆえきの樹液、くさった果実、けものふんの糞などに集まります。幼虫はエノキの葉を食べて育ち、冬になるとエノキの木の根もとまで下りて、積もった落ち葉のうらに糸はを吐き、そこにとまって冬ごしします。幼虫は背中とつきの突起が4対ともはっきりしています。

●よく似た種類

ゴマダラチョウ（幼虫）：幼虫はエノキの葉を食べる。背中とつきの突起の3対がはっきりしているのが持ちよう。



オオムラサキ幼虫（左の2匹）
 ゴマダラチョウ幼虫（右の1匹）



クチベニマイマイ オナジマイマイ科

大きさ：2.6～3.7cm 観察時期：3～11月

関西地方で最もよく見られるカタツムリの仲間で、昔から親しまれてきました。貝がらの口の部分が赤いのが特ちょうです。主に木の上で生活しています。カタツムリの仲間をはじめ、陸上で生活する貝は乾燥に弱く、雨の日にはよく活動しますが、晴れの日が続くと、からの中に引っこんで粘液を出し、からの口の部分に膜をはって水分の蒸発を防ぎます。クチベニマイマイがすむには湿った林が必要で、開発が進んだ大阪の平野部ではほとんど見られません。

●カタツムリの食事

カタツムリの仲間は主に草食性で、やわらかい葉を好みます。種類によって多少植物の好みはあるようですが、野菜なども食べます。口にはおろしがねのような働きをする細かい歯(歯舌とよびます)があり、食物をけずりとして食べます。

●さがすポイント ★★

里地や山に行って、やわらかい葉の上などをさがしてみましょ。雨の日にはよく活動するので、見つけやすくなります。また、カタツムリを専門に食べる昆虫

のマイマイカブリ (p24) がいたら、カタツムリが多い場所といえるでしょう。

●よく似た種類

ナミマイマイ：からは茶褐色で口の部分は赤くない。



ナミマイマイ



アカマツ マツ科

じょうりょくじゅ
常緑樹 高さ：25 m 花期：4～5月

人 とのかかわりが深い種

日当たりがよく風通しのよい場所を好み、栄養分の少ないやせた土や乾燥した土でもよく育ちます。アカマツは、以前は人里近くの山に一面に生えていて、家の柱や梁などの材木や、燃料、松ヤニをとるなど、人の生活にさまざまに利用されてきました。マツタケやシメジが生えるのもこのアカマツの林です。アカマツの林は、人がよぶんな木を伐ったり、落ち葉を取りのぞいたり手入れをしないと、だんだん弱って他の木（シイやカシなど）に移り変わってしまいます。近年では人の生活が変わって、アカマツを利用することがほとんどなくなったので、アカマツの林は荒れてしまいました。また、マツノマダラカミキリが運ぶマツノザイセンチュウが原因で枯れてしまう木もたくさんあります。

●アカマツにつく昆虫

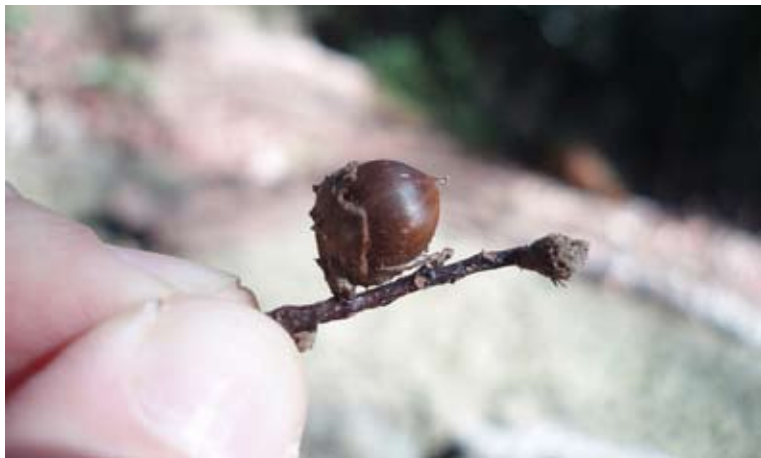
幹には、マツノマダラカミキリ、アカハナカミキリ、ウバタマムシ、クロタマムシなどが産卵し、幼虫はアカマツの材を食べて育ちます。また葉にはマツカレハ（ガの仲間）が産卵し、幼虫は葉を食べて育ちます。その他、ハルゼミやチツチゼミもアカマツの林で見られます。

●さがすポイント ★

里山の雑木林の尾根ちかくに、他の木にうもれるようにしてアカマツの林が残っています。

●よく似た種類

クロマツ：主に海岸近くに生え、幹は黒く、葉はかたくて先を触ると痛い。



ツブラジイ ブナ科

じょうりよくじゆ 常緑樹 げじゆん 高さ：20 m 花期：5月下旬～6月
実：翌年 10月ごろ

あたたかい地方に生える木で、平地から低い山の照葉樹林しょうようじゅりんに多く見られるシイの仲間です。大木になり、大きいものでは高さ20 m以上のまっすぐな幹を伸ばします。一年中つやつやしたかたい葉をいっぱいにつけます。ツブラジイは、他のシイやカシの仲間にくらべて葉が小さいので、コジイともよばれます。「ツブラ」というのは丸いという意味で、ツブラジイのドングリは小さくて丸い形をしています。そのまま炒って食べると、香ばしくておいしいドングリです。

●昆虫とのかかわり

ツブラジイの花は昆虫に花粉を運んでもらって受粉する虫媒花で、昆虫をよびよせるために強い香りを放ちます。この香りにつられて、カミキリムシやハナアブ、ハエの仲間などがよってきて、みつや花粉の一部を食べる代

わりに、受粉の手伝いをします。

●さがすポイント ★★

大阪府内では箕面国定公園や南部の照葉樹林でふつうに見ることができます。その他、社寺林や公園にも植えられています。ドングリが落ちていたら、いろいろひろって集めてみましょう。

●よく似た種類

スタジイ：ドングリはツブラジイよりひとまわり大きく、少し細長い形。幹の表面にはたて割れが入ることが多い。



ツブラジイの葉



ブナ ブナ科

らくようじゅ 落葉樹 高さ：30 m 花期：5月ごろ 実：10月ごろ

限 られた環境にすむ種

ブナは北のすずしい地方の植物で、近畿地方では生えている場所は高い山に限られています。大木になり、地中深くまで根を張ります。ブナ林は雨水をたくわえる能力が高く、「緑のダム」ともよばれます。これは、ブナ林では落ち葉が分解されてできた厚い土壌の層が、スポンジのような役割をするためです。

●ブナの豊作と凶作

ブナのドングリは先のとがった三角すいの形をしています。その実りは年によって豊作と凶作があります。ブナは実りの少ない年をつくることで、ドングリを食べる昆虫やほ乳類の数を減らしておき、5～7年に一度の大豊作の年には、これらの動物が食べきれないほどのドングリを実らせて、子孫を残す方法をとっているといわれています。

●さがすポイント ★★

大阪府内では北部の妙見山、南部の大和葛城山や金剛山、和泉葛城山にわずかにブナ林があるだけで、大切に保護されています。ブナは大木になり、幹はな

めらかでうすい灰色、ところどころに白っぽい雲のようなもようがあるのですぐに分かります（このもようは地衣類とよばれる生物が幹にはりついたためにできます）。

●よく似た種類

イヌブナ、ミズナラ：ブナと同じような場所に生える。幹のようすでブナと見分けることができる。



コナラ ブナ科

らくようじゆ 落葉樹 高さ：20 m 花期：4月下旬 実：10～11月

人 とのかかわりが深い種

雑木林を構成する主な木で、低い山に生えます。同じ仲間のクヌギやアベマキとともに、たきぎや炭として、昔から人々の生活に利用されてきました。しかし、昭和30年代から電気やガス、石油が広く使われるようになると、だんだん燃料に利用されなくなりました。これらの木々は、今でもシイタケ栽培のほだ木として利用されています。お店で「原木栽培」と表示のあるシイタケがそれで、味がよいのですが栽培に手間がかかるため、ほだ木の利用もだんだん少なくなっています（「菌床栽培」はおがくずなどを固めたもので栽培されたものです）。コナラが生える雑木林は、人が木を伐ったりして手入れをしないと、次第に他の木（カシやシイなど）に移り変わっていきます。

●コナラにつく昆虫

コナラには、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミなどのチョウの仲間がつかます。これらの幼虫は、コナラやクヌギなどの葉を食べて育ちます。

●さがすポイント ★

雑木林でふつうに見られます。秋にドングリが落ちていたらいろいろひろって集めてみましょう。

●よく似た種類

クヌギ、アベマキ：幹、葉やドングリの形で見分けることができる。



エノキ ニシ科

らくようじゆ
落葉樹 高さ：20 m 花期：4～5月 実：9月

山の斜面にある雑木林や、木がまばらに生えている河川敷など、日当たりがよくやや湿ったところに生えます。昔から人里にもよく植えられ、神社などでは幹の直径が1 mほどにもなる老木が見られることもあります。材木としては腐りやすいためあまり利用されないようですが、木のすがたがよいのでケヤキやクスノキなどととも公園などにも植えられています。春、若い葉とともにうす黄色の目立たない花をつけ、9月ごろにはオレンジ色～赤褐色の実がなります。この実は食べることができます。

●エノキにつく昆虫

エノキには多くの昆虫がつかます。タマムシやクロマダラタマムシの幼虫は枯れた材を食べ、オオムラサキ、ゴマダラチョウ、テングチョウ、ヒオドシチョウなどの幼虫やエノキハムシは葉を食べます。

●さがすポイント ★

雑木林、木が生えている河川敷、鎮守の森や社寺林などをさがしてみましよう。

●よく似た種類

ムクノキ：エノキと同じようなところに生える。ムクノキは葉の表面がザラザラしていることで見分けることができる。



ツバキ (ヤブツバキ) ツバキ科

しょうりよくじゆ
常緑樹 高さ：5～6m 花期：2～4月

人 とのかかわりが深い種

あたたかい地方の海ぞいに多い木ですが、山にも生え、冬でもつやつやした大きな葉をつけています。照葉樹林しょうようじゆりんに多く、また庭木としてもよく植えられています。他の花が少ない冬から早春にかけて、主に赤色の花をさかせます（まれに白やうす紅色の花もあります）。タネには油が多く含まれていて、「椿油つばきあぶら」として食用や、かみの毛を整えるためなどに広く利用されてきました。大阪府内ではあちこちで見られますが、特に南部に多く見られます。ツバキは多くの品種ひんしゆが栽培されているので、山にもともと生えているツバキを区別してヤブツバキとよぶことがあります。どちらも同じ種です。

● ツバキにつく昆虫こんちゆう

ツバキの実に産卵するツバキシギゾウムシや、花を食べるスギタニモンキリガの幼虫などがあります。

● さがすポイント ★

冬から早春の照葉樹林しょうようじゆ、鎮守の森、社寺林などで、赤い花をさがしてみましよう。古くなった花は、花びらがつなごったまま丸ごと落ちるのが特ちょうです。

● よく似た種類しゆ

サザンカ：生けがきや庭などによく植えられている。古くなった花は、花びらが1枚ずつバラバラと散る。



サザンカ



ショウジヨウバカマ ユリ科

多年草 花期：4～5月

山に生える植物で、谷川のほとりや、ややしめ湿った林の中などで見られます。花の色は赤むらさき色で、濃いものからうすいものまでいろいろあり、林の中でよく目立ちます。登山道のわきに生えていることも多く、春のハイキングなどで見かけることもあるでしょう。まれに葉の先に芽をつけることがあります。ショウジヨウバカマという名は、花の色に赤味があることから、この花を、酒好きで顔が赤い中国の伝説上の動物「猩々」にたとえ、また、放射状に重なって広がる葉を袴はかまにたとえたことからつけられたといわれています。

●さがすポイント ★★

春、花がさく時期に山に行き、谷川のほとりや林の中をさがしてみましよう。花はさき終わると上を向いて、がくへん片や花びらはそのまま緑色になっておそくまで残っています。また、地面にはりつくように生えている葉は一年中あるので、冬でも見つけることができます。

●よく似た種類

ノギラン：花のない時期にはよく似ている。



ノギラン



カヤネズミ ネズミ科

大きさ：5～8cm 尾の長さ：6～8cm

限 られた環境にすむ種

平地から山地の河川敷や農耕地のまわりなど、背の高い草地にすんでいます。日本で一番小さなネズミで、体重はわずか7～14gしかありません。体のわりに長い尾は、草の上を移動するときや食事のときなどに、草に巻きつけて体をささえるのに役立ちます。雑食性で草の実やバッタなどを食べます。ススキやヨシ、オギなど背の高いイネ科やカヤツリグサ科の植物の高さ70～110cmのところ、その葉を細く裂いたものを編んで球形の巣をつくります。カヤネズミは草地からあまり移動しないため、道路や宅地開発などでまわりの環境が失われると取り残され、やがてはすがたを消してしまいます。



カヤネズミの巣（緑色の葉でできた巣は、中に子ネズミがいることもあるので、さわらずにそっとしておきましょう。）

●さがすポイント ★★

カヤネズミのすがたはあまり見られませんが、草につくられた球形の巣は目につきます。巣があれば、そこにカヤネズミがいることが分かります。

●よく似た種類

ハツカネズミ：大きさ6～9cm、尾の長さ4～8cm。巣は、野外では他の動物が掘った地中の巣穴などを利用し、草の間につくることはない。



アマサギ サギ科

大きさ：51 cm なつどり 夏鳥・たびどり 一部旅鳥（5～9月）

限 られた環境にすむ種

人 とのかかわりが深い種

他のサギの仲間とちがって、水辺はあまり利用せず、田んぼや畑に多いサギです。大阪へは春に繁殖のために南の国からやって来ます。農耕地で主にカエルやバッタなどを食べ、木の上に巣をつくって繁殖します。アマサギは農薬の多い場所にはエサとなる生物が少ないため、よりつきません。アマサギがたくさん集まっていたら、カエルやバッタがたくさんいる安全な農耕地といえるでしょう。

ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギなど白いサギをひとまとめにしてシラサギとよぶことがあります。アマサギは繁殖期には頭・くびすじ・背が明るいうす茶色になるのが特ちょうです。

● さがすポイント ★★

春に、農耕地で耕うん機の後ろをついて歩いて、掘り起こされた土の中の虫などをさがすがたがよく見られます。

● よく似た種類

コサギ：全身が白く、くちばしは黒、足指が黄色いのが特ちょう。水辺で多く見られる。



コサギ



キジ

キジ科

大きさ：オス 80cm (尾羽 40 cm) メス 60cm (尾羽 20 cm)

留鳥

人とのかかわりが深い種

主に農耕地のまわりや河川敷などの草地にすんでいます。草の実や昆虫などを食べ、エサのとりやすい田んぼのあぜ道など地上で巣づくりをします。地上の巣は、イタチなどの敵にいつおそわれるか分かりません。そのため、ヒナはかえったその日から歩くことができます。

キジは、昔から人里近くにすんでいて人とのかかわりが深い種です。キジが畑の農作物を荒らして人とトラブルになることもありますが、狩猟鳥に指定されていて、大切な食料としても利用されてきました。また、キジは日本の国鳥にも選ばれています。

●さがすポイント ★★

春の繁殖期にはあぜ道などの草むらにいて、特にメスは全身が黄褐色に黒いもようのある地味な色をしているのでなかなか見つかりません。しかし、オスは「ケッケーン」と大きな声で鳴くので、いと分かります。

秋から冬には、オスとメスがそれぞれ別々に群れをつくって生活し、田んぼや草地などの開けた場所でよく見られます。

●よく似た種類

ヤマドリ：全体が赤褐色の羽に白いふちどりがあり、尾羽は 80 cm でキジの 2 倍の長さ。日本だけにすんでいる種類（日本固有種）で、数はあまり多くない。

コウライキジ：首に白い帯があるのが特ちょう。朝鮮半島原産で、北海道では放鳥されて野生化している。大阪でもまれに、飼われていたものやキジとの雑種が見られることがあり、外来種として注目されている。



ケリ チドリ科

大きさ：36 cm りゅうちょう 留鳥 大阪府：要注目



りつつある種



とのかわりが深い種

主に農耕地や河川敷などの草地にすみ、昆虫などを食べます。河川敷や休耕地などの地上に巣をつくります。大阪府内では各地で繁殖していて、田植え前の田んぼに巣づくりをってしまった場合には、ヒナが巣を出るまで、農家の人に田んぼのたがやしを待ってもらっていることがあります。卵は約30日でふ化します。地上の巣は敵におそわれやすいので、ヒナはかえったその日から歩きます。広い草原のような場所が少なくなっていくと、ケリも減ってしまう可能性があります。

ケリはチドリの仲間では一番大きい鳥で、足は黄色で長く、目が赤いため少しきつそうに見えます。気が強い鳥で、カラスや人が巣に近づくと親鳥が攻撃してくることがあります。

●さがすポイント ★

飛んでいるすがたは白と黒のコントラストがよく目立ち、「キッキッキ」というすどい声で鳴きます。秋から冬には群れていることが多い鳥です。

●よく似た種類

タゲリ：頭の後ろに長細い羽がのびている。ケリよりも湿地を好む。

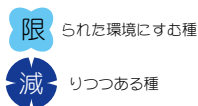


タゲリ



ヒバリ ヒバリ科

大きさ：17cm りゅうちょう 留鳥



限 られた環境にすお種

減 りつつある種

平地から山地の農耕地のまわりや河川敷などの草地、うめ立て地などにすんでいます。ヒバリのさえずりは春を知らせる声として昔から日本人に親しまれてきました。地面の土を少し掘ったくぼみに枯れ草などをしいて巣をつくり、3～5個の卵を産んでヒナを育てます。雑食性で、草地を歩き回って昆虫などの小動物や、草の実などを食べます。ヒバリがすむには、広い草地が必要です。最近では、広い農耕地も河川敷も少なくなり、すみかが失われつつあります。そのため、春にヒバリのさえずりを聞くことができる場所も少なくなっていました。

●さがすポイント ★

地面にいるときにはまわりの景色にとけこんでなかなか見つかりませんが、春の繁殖期には空高く飛び上がって羽ばたきながら空中にとどまり、大きな声でさえずるのですぐに分かります。

●よく似た種類

タヒバリ：ヒバリと同じようなところで見られる。「チツチツ」「ピツピツ」と鳴く。



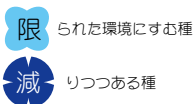
タヒバリ



オオヨシキリ ウグイス科

大きさ：18.5cm なつどり 夏鳥（4月下旬～10月初旬）

近畿：準絶滅危惧種 大阪府：準絶滅危惧



限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

4月下旬～5月に南の国からやって来て繁殖する夏鳥です。平地の広い河川敷や池のまわりなどに広がるヨシ原にすみ、ヨシの茎の間に枯れ草を巻きつけて、コップ形の深い巣をつくります。エサは主に草地の昆虫で、ヨシ原をかなりはなれてエサをとりに行くこともあります。大阪府内では淀川の河川敷が最大の繁殖地ですが、改修工事でヨシ原が大規模に失われ、オオヨシキリの数もずいぶん減ってしまいました。その他の川やため池には、まとまったヨシ原はほとんど残されておらず、すみかは限られています。

●さがすポイント ★

繁殖期のオスは大きな声で、「ギョギョシ、ギョギョシ」とさえずってなわばりを宣言するので、さがたが見えなくても

すぐに分かります。オスのさえずりをたよりにさがしてみましょ。

オオヨシキリは、1羽のオスが複数のメスと繁殖することがあります（一夫多妻といえます）。



オオヨシキリの巣

●よく似た種類

コヨシキリ：全長13.5cmで、オオヨシキリより小さい。旅鳥。春（5月初旬～6月初旬）と秋（8月下旬～10月初旬）の渡りの時期に、オオヨシキリと同じような場所で見られるが、数は少ない。さえずり方もちがう。



セツカ ウグイス科

大きさ：12.5cm りゅうちょう 留鳥 じゅんぜつめつぎく 大阪府：準絶滅危惧

限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

主にチガヤなどが生える河川敷や畑などの開けた場所にすんでいる他、うめ立て地も利用します。イナゴやガの幼虫など主に草地の昆虫を食べます。巣づくりが上手な鳥で、草むらの地上から15～60cmの高さに、いろいろなイネ科植物の葉とチガヤのわた毛のような穂（写真下、p57）をクモの糸でつづりあわせて深いコップ形の巣をつくります。最近では、すみかとなる河川敷の草地をはじめ、農耕地周辺やうめ立て地の草地が少なくなり、セツカは減りつつあります。

●渡りをする

一年中見られる留鳥ですが、過去の調査から、実は渡りをしており、夏と冬では個体が入れかわっていると考えられています。



チガヤの穂

●さがすポイント ★★

繁殖期になると、オスは「ヒツヒツヒツヒツ」と鳴きながら空高く飛び上がり、「チャチャッ、チャチャッ」と鳴きながら下降するさえずりでなわばりを主張します。鳴き声に注意してさがしましょう。


●よく似た種類

オオセツカ：セツカよりずっと大きく、府内ではほとんど見られない。



オオカマキリ カマキリ科

大きさ：7～9.5cm 観察時期：8～11月

 かな自然の象徴となる種

主に林のへりなどの草地にすんでいます。幼虫も成虫もよく似たすがたで、他の昆虫をつかまえて食べる肉食性です。交尾の後にメスがオスを食べることが知られていますが、必ず食べるわけではありません。卵のうで冬ごしし、春にふ化して夏の終わりには成虫になります。また、おなかの中にハリガネムシという長い虫（類線形動物の仲間）が入っていることがあり（寄生といいます）、つかまえたオオカマキリの成虫のおなかを水につけると、ハリガネムシがいれば出てきます。



オオカマキリの後ろばねは、全体が黒っぽい色をしています。

●さがすポイント ★

秋に、花にやって来る昆虫を待ちぶせしていることがよくあるので、花の近くをさがすと見つかります。

●よく似た種類

チョウセンカマキリ：平地の草地や田んぼに多く、後ろばねは一部が黒い。

ハラビロカマキリ：体は短くて太く、前ばねの中央に黄色い紋がある。ふつう木の上にすむ。



エンマコオロギ コオロギ科

大きさ：2.5～3cm 観察時期：8～11月

日本最大級のコオロギで、人里に多く、最もふつうに見られる種類です。人のひざたけくらいの草地や畑、人家の庭など、少し湿った地面があるとすんでいます。昼間はたいてい地面の浅いところにある穴や、刈りとった草の中、石や木の下などにかくれていて、主に夜に活動します。雑食性で、植物のくさったものや、昆虫、小動物の死がいなど、いろいろなものを食べます。コオロギやバッタの仲間は、幼虫の間ははねがありません。エンマコオロギは成虫になりたてのころにはよく飛びますが、次第に飛ばなくなり、地上で生活します。

●さがすポイント ★

積んである落ち葉や枯れ草の下などによくいます。秋には主に夜、大きくきれいな声で「ココロココロリー」と鳴く声をたよりにさがしてみましよう。エンマコオロギはとくに体が大きく、声もよく通って特ちょうがあるので、すぐに見分けることができます。

●よく似た種類

タイワンエンマコオロギ：まれに見られる。眉斑が広く、「リーリー」と鳴く。

●その他のコオロギ

コオロギの仲間は種類が多く、ツツシサセコオロギ、オカメコオロギ、ミツカドコオロギなどが大阪府内でふつうに見られる。



スズムシ スズムシ科

大きさ：1.5～1.7cm 観察時期：8～10月

限 られた環境にすむ種

人 とのかかわりが深い種

エンマコオロギよりも草たけが高く、^{しめ}湿った草地（ヨシp59などが生えるところ）にすんでいるコオロギの仲間です。昔から鳴き声を楽しむために飼育されることが多く、秋の鳴く虫の代表として広く知られてきました。今でも飼育してふやしたスズムシがお店でたくさん売られていますが、その一方で、野生のスズムシの鳴き声を聞く機会はとてま少なくなりました。その理由として、ため池の護岸工事や、里地の開発、^{かせん}河川敷の草刈り管理などで、スズムシがすむ深い草むらが減り、すみかが限られてしまったことがあげられます。

●さがすポイント ★★★

秋に、河川敷や林のへりなどの草むらで、「リーン、リーン」と鳴く声をたよりにさがします。ただ、スズムシの鳴き声は高音で小さいため、聞き取りにくく、特に最近ふえたアオマツムシが鳴いている場所では、スズムシの鳴き声はかき消されてしまって、なかなか聞き取れません。また、スズムシは草たけの高い草むらにいますので、つかまえるのがおぼつかしい昆虫です。このようなことを考

えると、意外とちかくにいいても気づかない昆虫といえるでしょう。

●よく似た種類

クマスズムシ：大きさ1.0～1.2cm。体は黒い小型のコオロギ。ススキなどのしげった草むらにすみ、「ウィーーーーン」と聞こえるような、細い声で鳴く。美声だが高い音で、しかも機械の音のような鳴き声なので、なれないと聞き取りにくい。



マツムシ マツムシ科

大きさ：1.8～2.4cm 観察時期：8～11月

限 られた環境にすむ種

人 とのかかわりが深い種

あたたかい地方に多いコオロギで、川の土手や草地、林のへりのササのしげみなど、やや乾いた草地にすみます。草たけにはあまりこだわらず、最低限身をかくすことができる高さがあればいいようです。高速道路の法面やうめ立て地の草地など、新しくできた草地にもいち早くやって来てすみつきます。このようなことから、わりとたくましい昆虫といえるでしょう。主なエサは植物質のもので、ツククサの葉などを好んで食べます。コオロギの中では大型で、子どもたちに人気があり、秋の鳴く虫としても親しまれてきました。

●さがすポイント ★★

秋に、林のへりなどで「チンチロリン」と鳴く声をたよりにさがしてみましょう。しかし関西地方では鳴き声が早く、「テッチリ」と聞こえます。

●よく似た種類

アオマツムシ：中国原産。主に市街地の街路樹や公園などにすみ、サクラなど広葉樹の葉を食べる。東京付近からほぼ全国に分布を拡大した。「リーリー」と大きな声で鳴く。幼虫・成虫

を問わず、葉の表またはうらの表皮を残して食べることが多いので、木の葉の食べあとを見ればいるかどうか分かる。



アオマツムシ



キリギリス キリギリス科

大きさ：3.5～4cm 観察時期：6～9月

よく親しまれてきた昆虫のひとつです。河川敷^{かせんしき}やススキの原のような、草たけの高い乾いた草地^{かち}にすんでいます。都市公園にもいますが、体が大きく、たくさんのエサを必要とするため、あるていどの緑がまとまってある公園にしかいません。強いあごを持ち、人間がこれにかまれると痛い目にあいます。また、前あしにはたくさんのトゲが生えていて、つかまえた昆虫^{こんちゆう}などを押さえるのに役立ちます。キリギリスは雑食性^{ざっしょくせい}ですが、このような体つきから肉食性^{にくしょくせい}がやや強いことが分かります。

●キリギリス釣り

タマネギやネギを数cmの長さに切って、竿^{さお}につけた糸の先にしぼり、キリギリスのオスを釣る遊びがあります。タマネギやネギのにおいの成分に引きよせられたオスが飛びつくというものです。

●さがすポイント ★

コオロギの仲間よりも早く、真夏から鳴き始めます。キリギリスは主に昼間に鳴き、「チョン……ギース」という力強い声は遠くからでも聞こえます。

●よく似た種類

ヤブキリ：木の上ですむ大型のキリギリス。成虫は肉食性が強いが、幼虫は草食でタンポポの花などを食べる。6月後半には成虫が現れる。鳴き声は「シュリリリリ・・・」と長く続けて鳴くタイプと、「ジッジッジッ・・・」と切って鳴くタイプがある。



トノサマバッタ バッタ科

大きさ：オス 3.5～4cm メス 4.5～6.5cm 観察時期：7～11月

限られた環境にすむ種

大きな川の河川敷やグラウンドのすみなど、ひざたけくらいの草地と裸地がセットになった荒れ地のような場所にすみます。このような環境は一時的にできたもので、すぐに建物がたてられたり草刈りがされたりして長続きしません。しかし、トノサマバッタは飛ぶ力がすぐれているので、すみかが失われると、次の場所をもとめて移動をくり返します。トノサマバッタはこのような限られた環境をうまく利用して生活している種類といえます。

トノサマバッタはイネ科やカヤツリグサ科の植物の葉を食べます。メスは幼虫のエサとなるこれらの植物が生える場所に、腹部の先で穴を掘って産卵します。卵は泡に包まれているので、乾燥している場所でも耐えることができます。年1回発生で、ふつうは9～10月に成虫になりますが、早いものでは7月後半に成虫になるものもいます。

●さがすポイント ★★

体の色は褐色、緑色、灰色と個体によってちがひ、地面や草の上にいるとき敵に見つかりにくくなっています(保護色といえます)。ひざたけくらいの草地を歩いてみて、大きなバッタが飛び出したらトノサマバッタかもしれ

ません。

●よく似た種類

クルマバッタモドキ：トノサマバッタと似た環境にすむ。胸部の背面に白っぽい色の>>形のもようがある。後ろばねを広げると、黒っぽい帯状のもようがある。



キアゲハ アゲハチョウ科

大きさ：春型 4～5cm 夏型 5～6.5cm 観察時期：3月中旬ちゅうじゆん～10月中旬

平地から高い山まで広く見られ、親しまれてきたチョウです。成虫は河川敷、田んぼや畑のまわりなど日当たりのよい草地に多く、いろいろな花の蜜を吸います。高い山では、オスが山頂になわばりを持ち、侵入してきた他のオスを追います。キアゲハは北のすずしい地方に多いチョウと考えられていて、よく似たアゲハチョウほどは多くありません。成虫が発生する時期は早く、3月中旬ごろから見るができます。大阪府内の平地では年3～4回発生し、春に発生する個体に比べて、夏に発生する個体の方が大型です。メスでは特にこの差が大きく、色も黒っぽくなります。

●幼虫の生活

セリ科の植物を食べます。まだ若い1～4齢幼虫は、白と黒で鳥の糞のようですが、サナギになる前の段階の終齢幼虫は緑、黒、オレンジ色の3色からなるあざやかな色をしていて、エサとなる草の上でよく目立ちます。危険を感じると、頭の後ろ（胸部）から強いにおいのするオレンジ色の角を出し、敵をおどろかせます。サナギで冬ごしします。

●さがすポイント ★

休耕田などセリが生えているところに、メスがよく産卵にやってきます。幼虫はニンジン、パセリ、ミツバなどのセリ科の野菜の葉も食べるので、畑や庭でもよく見られます。

●よく似た種類

アゲハチョウ：はねの黄色が全体的にうすく、前ばねのつけ根ちかくまでもようがあります。



ジャノメチョウ ジャノメチョウ科

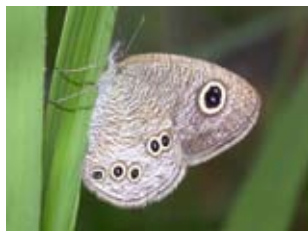
大きさ：2.8～3.5cm 観察時期：6月下旬～9月上旬

限 られた環境にすむ種
減 りつつある種

草地を代表するチョウで、主に河川敷や里山の農耕地、日当たりのよい林のへりや林道などで見られます。ジャノメチョウがすむには、里山の安定した草地が必要で、市街地に一時的にできた草地などにはいません。これは、ジャノメチョウが卵を地上に産み落とすことと関係しているのかも知れません。終齢幼虫は地中や地表に転がってサナギになり、何かにぶら下がることはありません。昔はふつうに見られるチョウだったのですが、開発や農耕地の圃場整備などで安定した草地が減って、すむ場所が限られてしまい、以前ほど見られなくなりました。

●さがすポイント ★★

成虫は年に1回発生し、アザミ類、ヒメジョオン、ヒメトラノオなどの花の蜜を吸ったり、けもの糞に来ることもあります。大型で飛び方もゆるやかなため、他のジャノメチョウの仲間とかんたんに見分けることができます。



●そのほかのジャノメチョウの仲間
ヒメウラナミジャノメ

ヒメウラナミジャノメ
里山でふつうに見られる小型の
ジャノメチョウの仲間。



ワラビ コバノイシカグマ科

多年草 観察時期：4～11月 収穫時期：4～5月

人とのかかわりが深い種

林のへり、田んぼや畑のまわり、川の土手など、人が定期的に草を刈り管理している日当たりのよい草地に生えます。シダの仲間には林の中などうす暗く湿った場所を好む種類が多くありますが、ワラビは日当たりさえよければ、やや湿ったところからわりと乾いたところまで生えています。人が草刈りをした場所はワラビにとってよい生育場所となり、生えたワラビは山菜やわらび粉として人に利用されてきました。このように、ワラビは人と深くかかわりながら生きてきた植物といえます。定期的な草刈りがされなくなると、他の植物がしげって日が当たらなくなり、ワラビは生きられなくなって次第にすがたを消してしまいます。

●ワラビを食べる

春に芽ぶいたばかりの若い葉は、あくをぬいて煮物などに利用します。秋には地上に出ている葉の部分は枯れますが、根のような地下茎は残っていて、この地下茎から質のよいデンプン（わらび粉とよびます）がとれます。これをわらびもちに利用しますが、今ではわらびもちとよびながら、わらび粉を使っていないものもあります。

●さがすポイント ★

春から夏に、林のへり、田んぼや畑のまわり、川の土手などをさがしてみましよう。意外と身のまわりにもふつうに生えているかもしれません。


●よく似た種類

林の中やへりにはイフヒメワラビ、林の中の川ぞいにはヒメワラビなどが生えますが、似た種類が多く、見分けるのはむずかしい。



クサソテツ メシダ科

多年草 観察時期：5～11月 しゅうかく 収穫時期：5～6月

 とのかかわりが深い種

大型のシダの仲間で、山あいの小川の岸など、自然が残っている湿^{しめ}った明るい場所に生えます。春になると、クサソテツは大きな株からゼンマイのように巻いた若い葉を出します。これはコゴミとよばれる山菜で、アクがなく人気があります。葉は成長すると長さ1mほどに大きく開き、その形はソテツ^にに似ています。春に出る葉はふつ^つの葉（栄養^{えいよう}葉）で、夏になると同じ株^{から}から少し形のちがうもうひとつの葉（胞子^{ほうし}葉とよばれ、シダ植物にだけある繁殖^{はんしよく}するための葉）が出て、胞子を飛ばします。クサソテツはきれいな水が流れている小川の岸に何株もかたまって生えることがありますが、よごれた水の流れている川にはありません。

●さがすポイント ★★

コゴミをとるなら春に、水がきれいな山あいの小川の岸をさがしてみましよう。また、胞子葉はふつ^つの葉が枯^かれてしまう冬でも、黒く乾いたすがたで立っていてよく目立つので、クサソテツが生えていることがわかります。

●よく似た種類

シダの仲間は似たような形のものが多くあり、見分けるのはなかなかむずかしい。



ツリガネニンジン キキョウ科

多年草 花期：8～10月



りつつある種



とのかがわりが深い種

田んぼや畑のまわりなど、明るい草地に生えます。ニンジンと名が
つきますがキキョウの仲間です。春に地下茎の先から出るまるい葉は
「とき」とよばれ、山菜として食べることができます。

ツリガネニンジンは主に里地に見られる植物で、人が定期的に草刈
りすることで保たれている草地に多く生えます。このような草地は
放っておくとやぶ状になって、やがて林に移り変わっていきます。最
近では草地が手入れ不足でやぶ状になってしまったり、住宅地など
として開発されたりして減りつつあります。ツリガネニンジンが生えて
いたら、そこは良好な里地の環境が残っているといえます。

●さがすポイント ★★

花の時期に、川の土手、田んぼや畑の
まわりなどをさがしてみましよう。ツリ
ガネニンジンの茎につく葉は細長くて、
地下茎から出る葉とはまったくちがう形
をしています。茎はまっすぐ伸びて、高
さ1mちかくなることもあります。茎
を切ると乳液にゅうえきが出ます。

●よく似た種類

ソバナが似ているが、大阪府内には
ない。



ヒガンバナ ヒガンバナ科

多年草 花期：9月



りつつある種



とのかわわりが深い種

以前は田んぼのあぜなどにたくさん植えられていました。これは、あぜをネズミやモグラなどから守るためといわれています。球根にはアルカロイドという毒がありますが、昔はつぶした球根を水にさらして毒めきし、飢餓の時に食べたそうです。今では圃場整備（田んぼの仕切り直し）が進み、あぜにヒガンバナを植えなくなりました。ヒガンバナは少なくなりましたが、人によく利用されてきた植物なので、今でも人里ちかくに生えています。もし山にヒガンバナが生えていたら、そのちかくには昔、人がすんでいたのかもしれない。

●葉と花は別々の時期

花がさいているときには葉はなく、花が終わると葉が出てくるのが特ちょうです。葉は細い刀のような形で、春には枯れて地上には何もなくなりますが、土の中には球根が残っていて、夏になるとまた花芽が出て来ます。ヒガンバナは古い時代に中国から持ちこまれたものといわれています。日本のヒガンバナは、花がさいても実がなりません。これは、日本に持ちこまれたものが、実のならないものだったためと

いわれています。

●さがすポイント ★★


圃場整備されていない昔ながらの田んぼや畑のあぜ、川の土手などにまとまって生え、お彼岸（9月中ごろ）の時期に真っ赤な花をさかせます。この花は遠くからでもよく目立ちます。

●よく似た種類 特になし。



子ガヤ イネ科

多年草 花期：5～6月

 とのかかわりが深い種

田んぼや畑のあぜ、川の土手など、定期的に草刈りがされる明るい草地に生えます。高さは30～80cmで、たくさんまとまって生えることから、「干のかや」という意味で子ガヤという名がついたといわれます。子ガヤは昔はどこにでもあって、ススキとともに人の生活にさまざまに利用されてきました。根茎は漢方薬に使われることもあり、まだ葉に包まれている若い穂をぬき取ってかむと、かすかに甘い味がし、昔の子どもはこれを「ツバナ」とよんでいました。

しかし、最近では草刈りが行われずに他の大型の草が茂ったり、開発が進んだりして、子ガヤが広がる草地は減りつつあります。



子ガヤの花

●さがすポイント ★★

子ガヤの穂には花がさいた後、ふさふさした白い毛の生えたタネができます。この白い穂を目印に、田んぼや畑のあぜ、川の土手などをさがしてみましょう。タネはやがて風に飛ばされて散っていきます。

●よく似た種類
特になし。



ススキ イネ科

多年草 花期：8～10月



人とのかわりが深い種

畑のまわりや空き地など、明るく乾燥した場所に生えます。ススキの葉や茎は長くて丈夫なので、昔からかやぶき屋根の材料として利用されてきました。屋根を葺くには大量のススキが必要で、昔は村はずれや山の上などに「カヤ場」とよばれるススキの原を残しておいて、初冬に村人が共同で刈り取って乾燥させ、たくわえておく風習がありました。今ではかやぶき屋根の家はめったになく、広いカヤ場はほとんど残っていませんが、岩湧山の山頂には、大阪で1カ所だけ残された大きなカヤ場があります。

秋の七草のひとつに選ばれていることから、ススキが人に親しまれていたことが分かります。以前に比べると、ススキと人とのかわりはずいぶんうすれてしまいましたが、今でも秋のお月見の時などにススキがかざられるなど、身近な植物です。

●秋の七草

秋の花（ハギ）、尾花（ススキ）、
葛花（クズ）、撫子（なでしこ）の花（カワラナデシコ）、
女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）（フジバカマ）、
朝顔の花（キキョウ）

●さがすポイント ★

ススキは株の根もとからたくさん茎が出ています。

●よく似た種類

オギ：茎は1本ずつ地面から出る。茎の節に短い毛がたくさんある。



林

草地や畑

川

池や湿地

田んぼや水路

市街地

山

里地

まち

ヨシ (アシ) イネ科

多年草 花期：8～10月

人とのかかわりが深い種

川や池、湖、湿地など、水ぎわや湿ったところならどこにでも生える、高さ1.5～3mの大きな草です。特に河口ちかくや広い湖の岸では広いヨシ原ができ、多くの生きもののすみかとなっています。秋には地上に出ている部分は枯れますが、地下茎は残っていて、春になると力強く芽びきます。人とのかかわりが深い植物で、茎でつくった「よしず」は、今も日よけなどに使われています。その他、最近では、ヨシが川や湖の水をきれいにしたり、魚の産卵場所や、稚魚のすみかとなっていることが見直され、ヨシ原を守る活動が行われているところもあります。大阪府内では、淀川の鵜殿に広いヨシ原が残されており、毎年2月には枯れているヨシの地上部を焼いて、春の芽びきをよくする「ヨシ焼き」とよばれる作業が行われています。ヨシが生えていたら、土が湿っている証拠です。

●さがすポイント ★

ヨシの葉は冬（1月ごろ）になるとたいてい枯れるので、夏から秋に水ぎわをさがしましょう。

●よく似た種類

ツルヨシ：川の上流に多く、地上をはう茎を出す。

セイタカヨシ（セイコノヨシ）：冬の間も枯れずに春まで緑色で直立している。



イカルチドリ チドリ科

大きさ：21cm 留鳥

近畿：準絶滅危惧種 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類

限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

主に川の中流やその少し上流の小石が多い河原などにすみ、小さな虫を食べています。河原の砂や小石の上に直せつ、小石そっくりの卵を産みます。かえったヒナも小石となかなか見分けがつかせません。まわりの風景にとけこむことで、タカなどの敵から身を守っているのです（保護色といいます）。

最近ではイカルチドリが見られる川は少なくなってきました。それは、川の上流域の開発が進んで生活排水が流れこみ、川の水がよごれたり、川の改修工事によって河原や中州がなくなったり、車で河原に乗り入れる人がいたりして、イカルチドリのすみかがこわされているからです。さらに、森林伐採や、スギ・ヒノキの植林地の手入れ不足などで山の雨水をたくわえる力が乏しくなり、大雨による川の急な増水で中州の卵やヒナが流されてしまうこともあります。イカルチドリが見られる地域は、川の上流～中流の自然が保たれているといえます。

●さがすポイント ★★

土手の上などから広くさがしてみましよう。川では中州や岩の上に1羽でいることが多く、流れの速いところや、水が深いところにはいません。（巣がある場所には近づかないようにしましょう。）

●よく似た種類

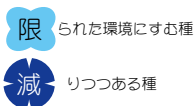
コチドリ：目のまわりの黄色が目立つ。
シロチドリ：首の黒帯がのどでとぎれ、足は黒色。
どちらも川の中流から河口でよく見られる。



チュウシャクシギ シギ科

大きさ：42cm 旅鳥（4～5月、9～10月）

近畿：準絶滅危惧種 大阪府：準絶滅危惧



限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

頭の2倍ほどもある長いくちばしが特ちょうです。冬は南の国ですごし、春には北の国で繁殖する渡り鳥で、大阪にはその渡りの途中で、春と秋に立ちよって休息します。主に海岸や河口の干潟でカニなどを食べる他、湿地や水田ではカエルや昆虫などを食べます。

チュウシャクシギにとって、渡りの途中でエサをとり、休息して体力を回復する干潟はとても重要です。しかし、今では大阪湾の自然の干潟はうめ立てなどで失われ、ほとんど残っていません。そこで、チュウシャクシギのような水鳥が集まる場所を確保するため、南港に人工干潟がつくられました（南港野鳥園 p123）。さらに、阪南市、堺市、淀川の中津にも人工干潟がつけられつつあります。

● 渡り鳥の保護

複数の国を行き来する渡り鳥にとっては、繁殖地、越冬地とその途中のすべての環境が大切です。渡り鳥の保護は地球上の問題として、世界の各地で考え対策していかなければなりません。日本はアメリカやロシア、オーストラリア、中国、韓国とそれぞれ2国間で、渡り鳥保護のための条約や協定を結んでいます。

● さがすポイント ★★

シギの間では大型の種類で、長く下向きに曲がったくちばしはよく目立ちます。

● よく似た種類

ダイシャクシギ、ホウロクシギ：くちばしの長さが頭の3倍ほどもあり、チュウシャクシギよりひとまわり大きい。



カワセミ カワセミ科

大きさ：17cm 留鳥

近畿：準絶滅危惧種 大阪府：準絶滅危惧種



りつつある種

背中はコバルトブルー、おなかはオレンジ色の美しい鳥です。主に平地から低い山の川や池のまわりにすみますが、冬は市街地の水辺でも見られます。水辺の木や杭の上、岩などにじっととまって、または羽ばたきながら空中にとどまって、水面を見つめ、魚を見つけると水中に飛びこんでつかまえます。春から夏には土のがけに巣穴を掘って、ヒナを育てます。近年は川やため池の改修工事が進んで、水辺にカワセミが本来の巣穴をつくる土のがけが少なくなってしまいました。しかし、水辺からはなれたところの、工事でできた土のがけなどを目ざとく見つけて繁殖しています。また最近では、塩化ビニール製のパイプでできた水ぬき穴を巣穴として利用するカワセミが見られるようになりました。このような例はまだ多くはありませんが、将来、市街地周辺でもっとふつうに繁殖するようになるかもしれません。

●さぐすポイント ★★

清流にすんでいるというイメージが強いようですが、じつはため池や川にごくふつうにすんでいます。市街地の都市公園のため池でも、冬の間はふつうに観察できます。川や池の水面上にはりだした枝先、杭や岩の上をさがし

てみましょう。「チーツ」とよくひびく声で鳴いて、水面すれすれを飛んでいくすがたもよく見られます。

●よく似た種類
特になし。



キセキレイ セキレイ科

大きさ：20cm リゅうちょう 留鳥

主に山にちかい川や溪流けいりゅうのほとりなどにすんでいます。冬には平地の人里はいろにやって来ることも多い鳥です。スマートな体型で、背中は灰色、おなかはきれいな黄色です。水辺を歩き回って、主に昆虫こんちゅうを食べています。春から夏にかけて、岩のすき間などに枯れ枝などを持ちこんでおわん形すの巣をつくり、ヒナを育てます。山の近くでは人家の屋根のすき間などに巣をつくることもあります。

他によく見られるセキレイの仲間には、ハクセキレイとセグロセキレイがありますが、それぞれ主なすみかとなる環境かんきょうがちがいます。キセキレイが山地の溪流でも見られるのに対して、ハクセキレイは平地の海岸から市街地のまわりに多く、セグロセキレイは山すそや農耕地のうこうちに多く見られます。

●さがすポイント ★

川岸など水の浅いところを歩いている鳥をさがしてみましょう。水辺で波をえがいて飛ぶ尾の長い鳥にも注意。





オオサンショウウオ オオサンショウウオ科

大きさ：50～70cm

かんきょうしょう ぜつめつきぐにるい

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類

減 りつつある種

豊 かな自然の象徴となる種

川の上流～中流の川岸に横穴の多い場所にすみ、一生を水中ですごします。主に魚やカエル、サワガニ、水生昆虫などを食べます。繁殖期は夏で、メスが川岸のえぐられた穴などに、ゼリー質に包まれジュズ状につながった卵を産み、オスが卵を守ります。

以前は里地の水路や小川にもいましたが、川の改修工事ですみかとなる横穴がなくなったり、農薬などの影響で水がよごれたりして、このような場所ではほとんど見られなくなりました。大阪府内では北部の山あいの川にのみ生息しています。オオサンショウウオがすんでいるところは、水がわりときれいで、エサとなる生きものが多い、自然なかたちの川が残っているといえます。

●世界最大の両生類

オオサンショウウオは世界最大の両生類で、大きなものは大きさが1mをこえます。日本にしかない種類です(日本固有種)。

●さがすポイント ★★★

なかなか見られるものではありませんが、箕面川や安威川などの猪名川水系、天王川などの武庫川水系の上流で、橋の上などから水中をながめてみましょう。(注意：特別天然記念物のため、つかまえることは禁止されています。)

●よく似た種類

特になし。



カジカガエル アオガエル科

大きさ：オス 4cm メス 8.5cm

大阪府：要注目

限 られた環境にすむ種
減 りつつある種

カジカガエルがすむには、岩がごろごろした川の上流（溪流）とそのまわりの林がセットになった環境が必要です。

体は岩と似たような地味な色をしていて、指には吸ばんがあり、岩などにはりついて登ることができます。5～6月ごろの繁殖期には、オスは川の岩の上に登ってなわばりもち、「フィーリリリ」ときれいな声でさかんに鳴いて、メスをよびます。メスは流水中の岩の下に卵を産みます。かえったオタマジャクシは流れのある水中で育つので口が大きく、岩に吸いついて表面に生えた藻をけずりとして食べます。8～9月ごろ上陸し、クモや昆虫などを食べるようになります。

●さぐすポイント ★★

5～6月ごろ、オスの鳴き声をたよりに岩の上などをさがしてみましょ。産卵は夜に行いますが、オスはしばしば昼間も鳴きます。また、産卵場所のまわりの木の幹にとまっていたり、岩のすき間にもぐりこんでいたりもします。指先に大きな吸ばんが発達して、平べったいのが特ちょうです。大阪府内で溪流の流

水中に卵を産むカエルはカジカガエルだけです。

●よく似た種類

声をまちがえる相手はいませんが、すがたはヌマガエルや、ニホンアマガエル（体が灰色のまだらもようのとき）に少し似ているかもしれせん。これらのカエルは、主に平地の田んぼなどで見られます。



ギンブナ コイ科

大きさ：15cm

ギンブナは日本で最もふつうにみられる淡水魚のひとつで、昔から親しまれてきました。流れのゆるやかな川、池、水路などにすんでいます。体は平たく高さがあり、銀色をしています。雑食性で、動物プランクトンや水生昆虫、藻などを食べます。

ふしぎなことに、ギンブナはオスの数が極めて少ないという特ちょうがあります。ギンブナの卵は、コイやドジョウなど他の魚の精子でもそれが刺激となって発生し、雑種ではなく完全なギンブナになることが分かっています。

●さがすポイント ★★

ギンブナは、大阪府内ではたいいの川やため池で見られます。魚つりの時には、ミミズのような動物性のエサでも、うどんなどでも食いつきます。

●よく似た種類

ゲンゴロブナ：ヘラブナ、カワチブナともよばれる。もともと琵琶湖水系だけにすんでいたフナの仲間で、ギンブナよりもっと大きくて体の高さがある。魚つりを楽しむためにため池に放

流されていることがある他、南部のため池では養殖もされている。



ゲンゴロブナ（中央）



カワムツ コイ科

大きさ：15cm

川の上流から中流にすんでいて、ごくふつうに見られます。中でも、水がきれいで、流れのゆるやかな淵ふちに多くすんでいます。雑食性ざつしょくせいでいろいろなものを食べますが、特に水生昆虫すいせいこんちゅうや、川上から流れてくる昆虫を好んで食べます。もともと西日本ぶんぽうに分布していた魚ですが、今では関東より北の地方でも見られます。これは、琵琶湖びわこの稚アユちあゆを全国の川に放流した時、混じていたカワムツもいっしょに放流されたものと考えられています。

●こんいんしよく 婚姻色

繁殖期はんしよくきにオスの体色が変わり、これを婚姻色こんいんしよくといいます。カワムツのオスでは、腹部ふくぶが朱色しゆいろに変わり、口のまわりには白いイボおいぼしのようなもの（追星とよびます）が現れます。

●さがすポイント ★

大阪府内では、山あいの谷川にはたいいていすんでいます。川の淵を上からのぞきこおと、群れて泳いでいるのが見られます。

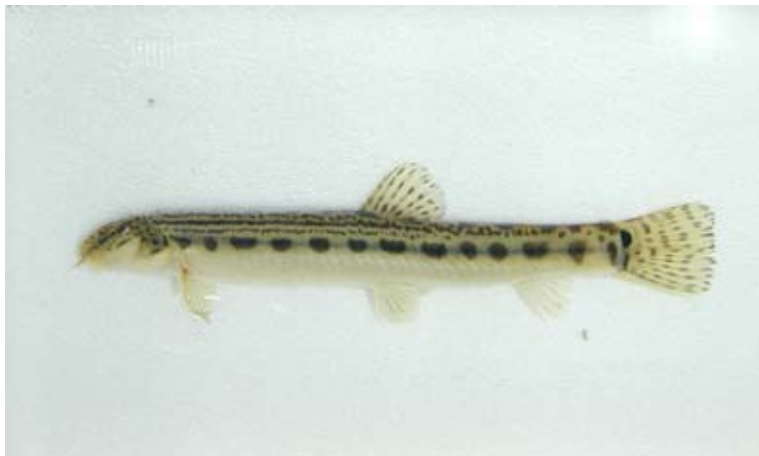
●よく似た種類

ヌマムツ：カワムツよりも少し下流にすむ。胸びれと腹びれの前側に赤いすじがあり、カワムツと見分けることができる。婚姻色はカワムツと同じ。

オイカフ：カワムツよりも少し下流にすむ。繁殖期のオスには赤や青のきれいな婚姻色が出る。



オイカフ



シマドジョウ ドジョウ科

大きさ：6～14cm



りつつある種

川の中流から下流ちかくの、流れがゆるやかで砂すなっほい川底かわぞこにすんでいて、砂にもぐることもあります。体の側面には、だ円形のもようがならんでいて、口のまわりには6本のひげひげがあります。エサは主に水生昆虫や微生物などで、砂すなといっしょに吸いこんでエサだけをと、砂ははき出します。4～6月ごろの産卵期には、水がきれいな小川に生えた水生植物すいせいしょくぶつの根や茎くきに卵を産みつけます。川の改修工事などで流れのゆるやかな砂地の場所が減へったり、水がよごれたりしたことが原因で、シマドジョウは減りつつあります。

●さがすポイント ★★★

大阪府内では山あいにの小川や平地の川などで見られますが、あまり多くはありません。砂地の川底をさがすのがポイントです。

●よく似た種類

スジシマドジョウ：シマドジョウと同じか、それより少し泥どろが多い砂地の川や池などにすむ。スジシマドジョウにはいろいろな型があり、見分けるのはむずかしい。



ドジョウ

田んぼなど泥の多いところにすみます。



スジエビ テナガエビ科

大きさ：5～6cm

人とのかわりが深い種

淡水にすむエビで、流れのゆるやかな川や、池、水路などにすんでいます。川では中流から河口ちかくまで広く見られますが、水のよごれたところにはあまりいません。体の色はほとんど透明で、黒いすじ状のもようがあり、内臓がすけて見えます。どちらかという肉食性が強く、小さな水生昆虫、甲殻類、水生ミズなどをよく食べ、死がいにも集まります。春から秋の繁殖期には、メスがあしの間に卵のかたまりをかかえているすがたが見られます。スジエビは、からあげやつくだ煮などの他、魚つりのエサとしても利用され、つり具屋さんで売られていることもあります。最近では外国産のスジエビも売られていて、人に運ばれてもともといなかった場所に分布を広げることがあり、問題になっています。

●さがすポイント ★

川や池、水路で、水草の間や石のすき間をあみですくってみましょう。あしが長く、上から見ると目（複眼）が左右に飛び出していることでミナミヌマエビと見分けることができます。

●よく似た種類

ミナミヌマエビ：スジエビと同じような場所にいる。



ミナミヌマエビ



サワガニ サワガニ科

大きさ：2.5cm

人 とのかかわりが深い種

一生を淡水中でくらすカニは、日本ではサワガニだけです。日本にしかいないカニの種類（日本固有種）で、水のきれいな川の上流（溪流）を主なすみかとしています。昼間は川の中やまわりの石のすき間、倒木の下などにかくれていて、夜になると活動します。雑食性で、水生ミミズや昆虫などの小動物、死がい、藻や植物の実などを食べます。水温が低くなる冬には、水辺から少しはなれた石や倒木の下などの湿ったところで冬眠します。サワガニがいたら、水がきれいな証拠です。

サワガニは、からあげなどにして食用にされることがありますが、寄生虫がいるので食べるには十分な加熱が必要です。

●子ガニのたん生

メスは、卵のかたまりをおなかにかかえて守り、かえった子ガニもしばらくの間はかかえて守ります。海にすむカニは、卵からかえったときは親とまったくちがうすがたをしています。サワガニは卵の中で成長し、親と同じカニのすがたで卵から出てきます。

●さがすポイント ★

水ぎわや岸の石や倒木をそっとどけて、その下をさがしてみましよう。

●よく似た種類

特になし。



モクズガニ イワガニ科

大きさ：7～8cm

人 とのかかわりが深い種

成長するとハサミに^も凜々^くのような毛を生やす大型のカニです。ふだんは川の中流～下流、そのまわりの水路などにすんでいます。秋の繁殖期になるとオスもメスも川を下って、河口や沿岸部まで出て繁殖します。卵からふ化した子ガニは、親とまったくちがうすがたをしていて（ゾエアとよびます）、海の中をただようプランクトン生活をしながら脱皮をくりかえしてカニのすがたになり、甲らが1cmほどになると、生活場所を求めて川を上ります。この大きさのモクズガニは足が長く、垂直なかべもよじ登ることができます。また、陸上も移動するため、途中に大きな堰などの障害物があっても乗り越えることができます。昔は淀川でもモクズガニ漁が行われていて、食用にされてきました。寄生虫がいるので食べるには十分な加熱が必要です。



モクズガニのハサミ

● さがすポイント ★★★

夜行性で、昼間は石の下などにかくれています。大阪府内で淡水で見られるカニは、モクズガニとサワガニだけ。

● よく似た種類

ケフサイソガニ、ヒライソガニ：河口の汽水域（海水が混ざるところ）にすむ。



ハグロトンボ カワトンボ科

大きさ：6cm 観察時期：5月末～10月中旬ちゅうじゅん



りつつある種

平地から低い山の水生植物すいせいしょくぶつが多いゆるやかな流れにすみ、大阪府内では広く見られるトンボです。メスは川の水面近くにある水生植物の茎の中に産卵さんらんします。幼虫は細長いヤゴで、水生植物につかまって生活しています。羽化した若い成虫わかは、いったん水辺をはなれて、近くのうす暗い林に集まって生活し、成熟せいじゅくする（繁殖はんしょくできるようになる）とふたたび水辺にもどって来ます。そのため、ハグロトンボがすむには水生植物の多いゆるやかな川と林の環境かんきょうがセットであることが重要です。近年、水路などゆるやかな流れの減少げんしょうや、水のごれなどさまざまな環境の変化によって、ハグロトンボは少なくなりました。

ハグロトンボは、社寺林しゃじりんなどうす暗い林の中を黒いはねでヒラヒラと飛ぶようすから、ゴクラクトンボとかホトケトンボなどともよばれます。

●さがすポイント ★★

6～7月に流れが近くにある神社の境内けいだいでさがすが、8月ごろ田んぼのちかくを流れる小川のふちをさがしてみましよう。成熟したオスは、岸辺の植物にとまってなわばりを守ります。

●よく似た種類

アオハグロトンボ：大阪にはめったにない。ハグロトンボよりはねの幅はばが広く、メスの前ばねには白い紋もんがある。



ゲンジボタル ホタル科

大きさ：オス 1.4cm メス 1.8cm 観察時期：5～7月

大阪府：要注目



りつつある種



とのかがわりが深い種

ヘイケボタルとともに日本のホタルの代表として人々に親しまれてきました。川の上流～中流の水がややきれいなところで、ちかくに林がある環境にすみます。幼虫は水中でまき貝のカワニナを食べて育ち、春になると陸に上がって、水ぎわの湿った土のすき間にもぐりこんでサナギになり、初夏に羽化します。そのため、川岸がコンクリートで固められてしまうと、幼虫はサナギになることができません。成虫は水辺の林のまわりを飛びまわり、メスは川岸のコケなどに産卵します。

里山の開発や、農薬による水のごれ、川の改修による岸のコンクリート化などによって、すみかが失われ、ゲンジボタルは減りつつあります。

●さがすポイント ★

幼虫のエサとなるカワニナが多い川の中流～上流をさがしてみましょう。成虫のオスは夜8～9時ごろに光りながらよく飛び回り、この時間、メスは草や木の上で光っていることが多いようです。夜中の12時頃になると、今度はメスが産卵場所に向けて飛び回ります。

●よく似た種類

ヘイケボタル：主に田んぼや水路などの止水（流れていない水）にすむ。幼虫のエサはモノアラガイやサカマキガイなどの水中の小さなまき貝。



ゲンジボタル



ヘイケボタル



カワニナ カワニナ科

大きさ：2.5～3.5cm（まれに4.5cmになる）

川の中流から上流に多く、ややきれいで冷たい水が流れる水路などにもすんでいます。エサは主に植物性のもので、石についた藻、水草、落ち葉などを食べます。そのため、水には適度な有機物（落ち葉の流れこみなど）が必要ですが、生活排水が多く流れこむなどして水がよごれるとカワニナはすむことができません。また、カワニナはゲンジボタルの幼虫のエサとなるので、ゲンジボタルが多い場所には必ずカワニナがいます。ゲンジボタルを保護するためにカワニナをふやす活動をしているところもあります。

●卵ではなく小さな貝を産む

カワニナは卵を産まず、親の体の中で育った小さな貝を産みます（卵胎生といえます）。1匹のカワニナから約150匹の稚貝が産まれます。

●さがすポイント ★

川の中流～上流で、岩などにくっついていないかさがしてみましょう。

●よく似た種類

琵琶湖の周りには18種、大阪府内でも数種のカワニナの仲間がいて、見分けることはなかなかおぼろしいものです。

また、河口の干潟にはウミニナがすんでいます。



マシジミ シジミ科

大きさ：2～3cm（まれに5cmをこえる）



りつつある種

流れがゆるやかで、底が砂地の小川や水路などにすむ二枚貝です。ふだんは呼吸する管（水管といいます）だけをカウの外に出し、砂にうずまっています。水中のプランクトンや有機物（動植物の残がいなど）を食べるので、水は少しよごれていてもよいのですが、あまりよごれるとすめなくなってしまう。マシジミは食べることができませんが、ふつつお店で売っているのは河口の汽水域（海水が混ざるところ）にすんでいるヤマトシジミという別の種類です。最近ではこのヤマトシジミの代わりに、中国や韓国、ロシアなどから外国産のシジミの仲間が大量に輸入され、その一部が川などで野生化して問題になっています。

●オス・メスの区別がない雌雄同体
マシジミは体の中で精子と卵子の両方を作り、自分の精子の遺伝情報のみで卵子が発生する「雄性発生」とよばれるめづらしい方法で繁殖します。

●さがすポイント ★★

死んだシジミの貝がらが落ちているところをさがすと、生きたシジミも見つかります。あみで底の砂ごと

すくってみましょう。

●よく似た種類

汽水域にはヤマトシジミがすむ。また、外国産のタイワンシジミが淀川水系でもふえているが、区別はむずかしい。



カイツブリ カイツブリ科

大きさ：26cm リゅうちょう 留鳥

池や川でよく見かける水鳥です。足には水かきがあり、水によくもぐって小魚をつかまえて食べます。水草や茎を利用して水に浮いた巣（浮巣）をつくり、3～6個の卵を産みます。20日間ぐらいすると、白と黒のシマもよりのヒナがかえります。ヒナはすぐに泳ぐことができ、エサを親鳥からもらうだけでなく、自分でもとることができます。大阪府内の池や川では、溪流をのぞいて、広い範囲にたくさんすんでいて、エサの小魚さえいれば、水の深さやよごれはとくに気にしないようです。

●さがすポイント ★

市街地のため池でもよく繁殖しています。春に、水生植物の多い場所をさがしてみましょ。 「ケレケレケレ」と大きな鳴き声が聞こえたら、カイツブリがいると分かります。

●よく似た種類

バン：カイツブリと同じようなところで見られる。くちばしの先は黄色く、つけ根からひたいにかけて赤い肌が目立つ。わき腹に白い線がある。バンは

水かきがなく、水にはほとんどもぐらない。バンは主に水草などを食べる。



バン



カワウ ウ科

大きさ：82cm リゅうちょう 留鳥 大阪府：要注目

分布 拡大中の種

池や川で最近ふえている黒い水鳥です。水にもぐるのがうまく、淡水・海水のどちらでももぐって魚をつかまえて食べます。2月ごろに、池や川の近くにある木の上に巣をつくり、集団で繁殖します（集団繁殖地をコロニーとよびます）。

カワウは大阪府内では1970年ごろまであまり見られませんでした。1980年ごろからふえ出し、2000年以降には漁業被害や、カワウのコロニーがある場所の木が大量の糞のせいで枯れてしまうなどの被害を起こすほどになりました。2006年から2007年にかけて府内でカワウのねぐらの調査が行われ、それによると合計でおよそ4000羽もいることが分かっています。

●カワウの日光浴

岸や岩などの上で休んでいるカワウが、つばさを大きく開けているすがたをよく見かけます。これは、水にもぐってぬれた羽を乾かしているところです。カモの中間の羽は、体から出る油を羽づくろいのときにぬっているので水をはじけますが、ウの中間は体から油が出ず、羽は水をはじかないので乾かす必要があるためです。

●さがすポイント ★

空を飛んでいるときはカラスのように全身が真っ黒ですが、カワウは胴体から頭の方が尾の方より長く、ふわふわと直線に飛びます。時には群れてV字形に編隊を組みます。

●よく似た種類

ウミウ：海辺の岩などで巣づくりをする。大阪府内にはほとんどいない。



ニホンイシガメ イシガメ科

大きさ：13～18cm

環境省：情報不足 大阪府：要注目



りつつある種

主に山に近い水辺にすむカメで、川の流れのゆるやかなところや、ため池を中心に広く見られます。日本にしかない種類のカメです（日本固有種）。親ガメは陸にもよく上がり、池から池へと数百メートルも移動することがあります。そのため、池と池の間に道路などができると、移動できなくなったり、車にひかれてしまったりします。ニホンイシガメが安心してくらすためには、山ぎわの池と池とつながりが重要です。雑食性で、貝類などの底生動物、水草などを食べます。メスは夏、水辺に近い砂地ややわらかい地面に穴を掘り、卵を産みます。子ガメは「銭亀」ともよばれ、ペットとして飼われることもあります。冬は水の中の落ち葉や泥などにもぐって冬眠します。

●さがすポイント ★★

山にちかい流れのゆるい川などをさがしてみましょう。岩の上などで日光浴をしていることもあります。甲らはお尻側のへりがギザギザ、甲らの中央に1本のすじ状のもりあがりがあります。

●よく似た種類

クサガメ：平地から山地に分布。甲らのへりのギザギザがなく、甲らに3

本のすじ状のもりあがりがある。多くの場合、顔や首には黄緑色のもようがある（ただし、顔や首が真っ黒のクサガメもいる）。



クサガメ（左） ニホンイシガメ（右）



モリアオガエル アオガエル科

大きさ：4～8cm(オスは6cm以下が多い)

大阪府：準絶滅危惧

減 りつつある種

豊 かな自然の象徴となる種

主に山林にすみ、昆虫やクモなどを食べます。アオガエルの仲間の指には吸ばんがありますが、モリアオガエルの吸ばんは特に大きく、木の幹や枝を自由に移動できます。繁殖期以外は、水辺をはなれて木の上で生活しているため、ほとんど人目につきませんが、それほどめずらしいカエルではありません。5～6月ごろの繁殖期には、林内や林のへりにある池や水たまりに集まってきて、水面上に伸びた木の枝先や岸辺の土に、白っぽい泡に包まれた卵(卵塊とよびます)を産みます。モリアオガエルがいたら、まとまった面積の自然林と水辺とのつながりが残されていると考えるとよいでしょう。

●さがすポイント ★★

繁殖期によく目立つ白い卵塊をさがしてみましょ。大阪府内では北部の山あいの池で見られます。ちかくの木には、産卵に来たモリアオガエルがとまっているかもしれません。モリアオガエルは個体によって、体のもようがないものと、茶色いマダラもようのものがいます。また、光彩(ひとみのまわり)の色は少し赤みがあります。



モリアオガエルの卵塊

●よく似た種類

シユレーグルアオガエル：体も吸ばんも少し小さく、光彩の色は黄色っぽい。湿地や田んぼのまわりに多い。



ギンヤンマ ヤンマ科

大きさ：7cm 観察時期：4月中旬～10月末ごろ

子どもたちに人気のある大型のヤンマです。平地から低い山地の、水生植物が多い大きな池にすんでいます。オスは、開けた水面の一部をなわばりにし、飛び回ってパトロールするので、池はあるていどの広さが必要です。オスは、なわばりに他のオスが入ってきたら攻撃して追い出し、メスが入ってきたら追いかけて交尾します。その後2匹がつながったまま、メスは水草などの中に卵を産みこみます。幼虫は大きなヤンマ型のヤゴで、背中に1本の太い黒いすじがあるのが特ちょうです。羽化後、まだ若い成虫はいったん水辺をはなれて遠くまで移動することがありますが、成熟するとまた水辺にもどってきます。

●ギンヤンマをつかまえて遊ぶ

日中の明るいときには、細い竹の先に糸をつけ、その先におとりとなるメスをしばってオスの前で飛ばし、オスをつる「トンボつり」があります。また、夕方、辺りがうす暗くなったころには、糸の両はしに小石をしばりつけた「ブリ」とか「ブリ玉」とよばれるものを空中に放り投げ、エサとまちがえて近よってきたギンヤンマをからめとる方法もあります。

●さがすポイント ★

大きくて見通しのよい池にすみ、体が大型なので、いればすぐに分かります。

●よく似た種類

クロスジギンヤンマ：ギンヤンマよりも山の方に多く、成虫は体に黒いすじが目立つのが特ちょう。オスの体色は青みが強い。成虫が見られる時期は、ギンヤンマよりも少し早く、4月上旬～6月下旬。



チョウトンボ トンボ科

大きさ：3.5cm 観察時期：6月上旬じょうじゆん～9月末ごろ



りつつある種

平地から低い山にある、水生植物すいせいしょくぶつが多い池や水路などにすみます。羽化後、まだ若い成虫は、近くの林などに集まって木々の間の高いところを飛び回ってすごします。やがて成熟すると、水辺にもどります。オスはそこでなわばりをもち、飛びまわったり水辺の植物の先にとまったりしてなわばりを守ります。チョウトンボは水生植物のある水辺と林がセットになった、やや自然が豊かなところにすむトンボといえます。近年、このような環境かんきやうは少なくなり、チョウトンボの数も減へいっています。以前は田んぼでも見られましたが、圃場整備が進んだ今の田んぼではすむことができず、まれに飛んで来るくらいです。



チョウトンボのはねは、光の当たり方によっては青く見えます。

●さがすポイント ★

水生植物が多い池などをさがしてみましよう。青むらさき色の大きなはねでヒラヒラ飛ぶので、いたらすぐに見つけることができます。飛ぶすがたは優雅に見えますが、なかなかすばしっこく、つかまえるのは少しむずかしいかもしれません。

●よく似た種類 特になし。



ナニフトンボ トンボ科

大きさ：3cm 観察時期：6月下旬～11月末
かんきょうしょう ぜつめつぎく にるい
 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 大阪府：準絶滅危惧

限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

日本にしかいないトンボの種類（日本固有種）で、近畿地方の各府県と、中国地方・四国地方の瀬戸内海に面した地域に分布しますが、あまり多くはありません。主に低い山の林に囲まれた池にすみますが、大阪府内では平地のため池で見られることもあります。ただし、水辺の植物が多く生えていることと、産卵場所となる岸辺の湿った土が必要です。ナニフトンボという名前は、最初に発見された場所が、浪速（大阪）だったことからつけられました。このことから、この名前がつけられた1915年ごろには、大阪に豊かな自然があったことが分かります。今では池の岸がコンクリートで固められたり、池の水が農業用水に利用されなくなって池がうめ立てられたりして、すみかとなる環境が減り、なかなか見られないトンボになってしまいました。

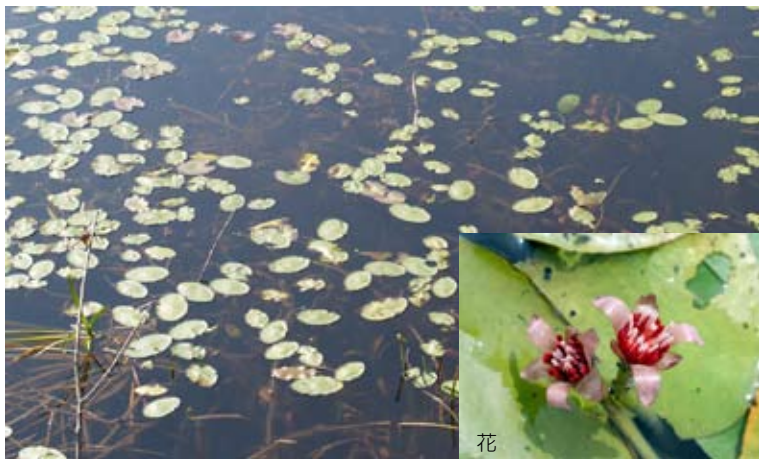
●青いアカトンボ

ナニフトンボはアカトンボ（アカネ）の仲間ですが、体は赤くならず、成熟したオスは黒っぽい地色に青白い粉をふいたようになるので、見分けることができます。メスは黄色と黒色のもうがあります。

●さがすポイント ★★★

山ざわや山あいにおいて水生植物が多く、岸が土できている池をさがしましょう。

●よく似た種類
特になし。



ジュンサイ スイレン科

多年草 花期：6～8月 大阪府：要注目



りつつある種



とのかがわりが深い種

やや水がきれいな浅いため池や沼地に生える水草で、水底から茎を伸ばし、5～10cmくらいの小判形の葉を水面上に浮かべます。夏になると、あまり目立たない赤い小さな花を水面上にさかせます。若い芽は水中にあって、ぬるぬるした透明のゼリーのようなものに包まれています。これは日本料理の汁ものなどに使われます。ジュンサイの芽を収穫するために、秋田県を中心に東北地方では水田などを利用したジュンサイの栽培が行われ、芽はピンづめなどで販売されています。

大阪府内ではジュンサイは山あいのため池などに生えていますが、水のごれ（富栄養化）が原因で少なくなっていました。

●さがすポイント ★★★

山あいのため池などで、水面上に浮かぶ小判形の葉をさがしてみましょう。

●よく似た種類

ヒツジグサ（スイレン）：葉に深い切れこみがある。



ヒツジグサ



オニバス スイレン科

一年草 花期 8～9月

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 近畿：絶滅危惧種C 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類



りつつある種

やや栄養分が豊富な平地のため池やお堀などに生えます。葉は直径が0.3～1.5 mほど、大きいものでは2 m近くにもなり、全体にしわがよっていて、裏表ともにトゲがあります。ハスと名がついていますがスイレンの仲間で、8～9月に赤むらさき色の花をさかせます。とても成長の早い一年草で、春にタネが発芽し、急速に成長して夏には立派に大きくなります。オニバスが見られるような平地のため池は、以前は農業用水として利用されていましたが、最近ではあまり使われなくなり、うめ立てられて住宅などに代わってしまうことが多くなりました。そのため、オニバスもあまり見られなくなりました。

●さがすポイント ★★★

大阪府内では北部や南部のため池に記録があります。オニバスのタネにはそろって一度に発芽しない性質(休眠性)があるため、同じ場所で次の年も出てくるとは限りません。逆に、今までなかった池でも突然オニバスが出てくることがあります。これは何年も底の土にうもれていたタネが、ため池の水をぬいたり、底の土を掘り起こ

したりしたひょうしに、突然発芽するからです。



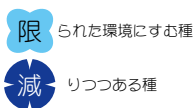
オニバスの花

●よく似た種類 特になし。



モウセンゴケ モウセンゴケ科

多年草 花期：6～8月 大阪府：準絶滅危惧



限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

山の湿地や水のしみ出る斜面など、栄養分に乏しいごく限られた環境に生える食虫植物です。葉には毛が生えていて、その先から出る粘液で小さな虫をとらえ、消化液を出して消化して栄養（チツ素）を吸収します。コケと名前がつきますが、コケの仲間ではなく、種子植物です。6～8月には株もとからすーっと1本の茎をのばし、その先に白くて小さな花をさかせます。

湿地という環境は開発などで失われやすく、モウセンゴケをはじめ、湿地を主なすみかになっている生きものは減りつつあります。大阪府内では、能勢町の地黄湿地や、和泉市の信太山湿地が代表的で、大切に保護されています。



モウセンゴケの葉

●さがすポイント ★★★

湿地のすみや、水のしみ出る斜面などで地面にはりつくように生えています。小さな植物なので、ふまないように注意してさがしてみましょう。（注意：数が少ない植物です。採ったりせず、観察するだけにしましょう）

●よく似た種類

トウカイコモウセンゴケ



ヒシ ヒシ科

一年草 花期：7～9月



とのかかわりが深い種

栄養分が多くややよごれた、ため池や流れのない水路などに生える水生植物です。肥料や生活排水が流れこむなどして栄養分が多い水を好むため、人の生活場所のちかくに多くあり、山おくにはあまりありません。繁殖力が強く、富栄養化した池では、水面を完全におおってしまうほどふえることもあります。ヒシの若い実は塩ゆでなどにして食べることができ、少しクリにに似た味がします。



ヒシの実

2本のするどいトゲがあり、大きさは3～5 cm (トゲを含む)。

●さがすポイント ★

平地のため池などで水面にうかぶひし形の葉をさがしてみましょ。葉柄の部分はふくらんでうきぶくろの役割をしています。7～9月には白い花がさき、秋には実が岸ちかくにたくさん落ちています。

●よく似た種類

オニヒシ：実のトゲは4本あり、実の大きさは4.5～7.5 cm (トゲを含む)。

ヒメヒシ：実のトゲは4本あり、実の大きさは2 cm (トゲを含む)。



ヤマカガシ ヘビ科

大きさ：60～120cm（まれに140cmになる）



りつつある種

特に田んぼのまわりに多く、主にカエルやオタマジャクシを食べるヘビで、水にもぐって小魚も食べます。体色は地方や個体によってちがいが、関西ではもようがはっきりせず全体的にかっ色の個体が多く見られます。アオダイショウに似ていますが、ヤマカガシのうろこの中央にはすじ状のもりあがり（キールとよびます）があるのが特ちょうです。ヤマカガシの子ヘビは赤と黒のもようがはっきりしていることが多く、首の後ろに黄色の帯が目立ちます。ヤマカガシがすむには、カエルがたくさんすむ里地の湿った環境が必要です。しかし近年は、このような環境が開発などで失われつつあります。そのため、エサとなるカエルが少なくなって、ヤマカガシも減りつつあります。

●ヤマカガシは毒ヘビ

性格はおとなしく、人に出会おうとたいてい逃げますが、毒ヘビなので注意が必要です。ヤマカガシの毒牙は口のおくの方にあるため、浅くかまれた場合には大事にはなりません、深くかまれた場合には毒が体内に入って死亡することもあります。

●さがすポイント ★★

カエルが多い田んぼや湿地のまわりをさがしてみましょう。（注意：ヘビに気づかずふんでしまってかまれることがあるので、草むらなど見通しの悪いところにはむやみに入らないようにしましょう。）

●よく似た種類

アオダイショウ：うろこのキールがない。



アカハライモリ イモリ科

大きさ：7～14cm

環境省：準絶滅危惧 大阪府：要注目



りつつある種

主に山ぎわの田んぼや池、水路など、流れのほとんどない水辺にすみ、オタマジャクシや水生昆虫などを食べます。メスは4～7月に、水草や水底に沈んだ落ち葉などに卵を一つづつはさむように産みつけます。卵からかえった赤ちゃんイモリには外側に出たエラがあり、しばらく水中ですごした後、夏から秋に変態して（エラがなくなって）上陸します。上陸後しばらくの間、田んぼのまわりや林などの湿った環境で陸上生活をし、成長して繁殖できるようになると水辺にもどってきます。このように、アカハライモリがくらすには、水辺とそのまわりの湿った環境が必要です。以前は大阪の平地にもたくさんいましたが、圃場整備などの影響を受けてすみかは減少し、平地ではほとんど見られなくなりました。アカハライモリがいたら、水辺のまわりに林が広がる環境が残っていることでしょう。

●さがすポイント ★★

アカハライモリはオタマジャクシをよく食べるので、春～夏に、カエルの卵やオタマジャクシがたくさんいる水辺をさがしてみましよう。成長した個体には、おなかにあざやかな赤いまだらもようがあります。

●よく似た種類

カスミサンショウウオ：同じような場所にカスミサンショウウオがすんでいることがある。とくに変態前のまだエラのある状態（幼生という）ではアカハライモリの幼生とよく似ている。



ニホンアカガエル アカガエル科

大きさ：3.5～7.5cm



りつつある種

平地から低い山の林の中、田んぼや湿地のまわりにすみ、地面や落ち葉の中の昆虫やミミズなどを食べます。ふだんは主に陸上で生活しているカエルで、泳ぎはあまりうまくありません。ニホンアカガエルは真冬～早春に、浅く流れのない水に産卵します。そのため冬の水辺と林とのつながりが必要です。昔は田んぼを主な産卵場所にしていたが、近年は圃場整備によって田んぼや水路のようすが変わってしまい、冬に水のある場所は少なくなっていました。また、たとえ水があっても、林との間に深い水路などがあると行き来できません。近年、産卵場所は少なくなり、ニホンアカガエルもあまり見られなくなりました。



ニホンアカガエルの卵塊

●さがすポイント ★★

2～3月ごろ、山あいの田んぼや湿地で卵塊をさがしてみましょう。

●よく似た種類

ヤマアカガエル：やや山の方にすみ、ニホンアカガエルと同じ所に産卵する。

タゴガエル：さらに山の方にすみ、林内の地中から水がしみ出しているようなところ（伏流水といえます）に産卵する。



トノサマガエル アカガエル科

大きさ：5～9.5cm



りつつある種

主に里地の田んぼやため池のまわりにすみ、クモや昆虫などを食べます。4～6月ごろ、田んぼなど浅く流れのない水辺に産卵し、子ガエルは6月下旬～9月に上陸します。トノサマガエルは田んぼの害虫をたくさん食べてくれるので、人間にとっては役に立つカエルです。田んぼの他に、周辺の林でもよく活動するので、トノサマガエルがくらししていくためには、田んぼと周辺の林とのつながりが必要です。トノサマガエルがいたら、そこにはまだ田んぼと周辺の林というまとまりのある良好な里地の環境が残っているといえます。



トノサマガエル（オス）

トノサマガエルの体色は褐色や、山ぶき色っぽいものなどさまざまですが、オスには濃い色の斑紋がありません。

●さがすポイント ★

田んぼや水路、ため池や小川のまわりをさがしてみましょう。

●よく似た種類

ダルマガエル：トノサマガエルより少し小さく、体型がずんぐりしている。数が少なく、大阪府内では一部の地域にしかいない。



タモロコ コイ科

大きさ：10cm



りつつある種

川の流れのゆるやかな場所や、田んぼや水路、ため池などにすむ小魚です。体は灰白色で、側面には胸から尾にかけて黒っぽい色の帯があり、2本の口ひげがあります。雑食性でプランクトンや水生昆虫、水草、小魚などを食べます。近年、川の改修工事で川岸や底をコンクリートで固めたり、川をまっすぐにしたりして、流れのゆるやかな場所が少なくなりました。また、圃場整備で田んぼに水を引くしくみが変わって、魚が水路と田んぼを自由に行き来できなくなったりして、タモロコのすみかが少なくなっています。さらに、北米原産のブルーギルやオオクチバスなどが放流された「ため池」では、タモロコは食べられてほとんどいなくなってしまう。

●さがすポイント ★★

ブルーギルやオオクチバスのいないため池、水路、川の流れのゆるやかな場所をあみですくってみましょう。

(注意：ブルーギルやオオクチバスの飼育、放流は法律で禁止されています p116)。



ブルーギル（幼魚）
タモロコノ天敵となる外来種。



メダカ メダカ科

大きさ：3～4cm

環境省：絶滅危惧Ⅱ類 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類

限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

田んぼや水路、小川、ため池など人里ちかくにすみ、最も親しまれてきた魚のひとつです。ところが、最近では野生のメダカはなかなか見ることができないほど減ってしまいました。これは、農薬や肥料で水がよごれてきたことや、川の岸や底がコンクリート化されるなどしてゆるやかな流れや水草が少なくなったこと、また、圃場整備で田んぼと水路とを魚が自由に行き来できなくなったことなど、メダカのすみかが失われてしまったためです。

●さがすポイント ★★

大阪府内ではメダカは大変少なくなりましたが、山あいの小川や、田んぼの水路などではまだ見ることができます。メダカの尻びれはつけ根が幅広く、台形なので見分けることができます。

●よく似た種類

カダヤシ：北米原産のグッピーの仲間。カの幼虫（ポウフラ）をよく食べるので、力を絶やす（減らす）目的で日本に持ちこまれた。各地でふえて、メダカを追いやっていることがある。



カダヤシ
（注意：カダヤシの飼育、放流は法律で禁止されています p116）。



アキアカネ トンボ科

大きさ：4cm 観察時期：6月上旬～12月中旬



りつつある種



とのかわわりが深い種

代表的なアカトンボ。日本にしかないトンボの種類（日本固有種）で、国内に広く分布します。平地から低い山の水生植物が多い池、田んぼや水路など、流れのほとんどない浅い水辺にすんでいます。とりわけ、田んぼと深いかかわりがあるトンボです。秋に田んぼなどの水たまりに産み落とされた卵は、そのまま冬をこします。昔の田んぼのまわりには、水路や水たまりなど多様な環境があり、卵やヤゴが育つ場所がたくさんありましたが、近年では圃場整備で単純な環境につくりかえられたり、田植えの時期が変わったりして、すみかが少なくなっていました。アキアカネは昔は人の生活とともにうまくらしていました。今では人の生活の変化によって、くらしにくくなって減ったトンボといえます。



アキアカネ（左）、ナツアカネ（右）

●さがすポイント ★

夏の間はずいぶん山の上へ移動します。このときはまだ未熟で、茶色っぽい色をしています。秋になると成熟して腹部が赤くなり、山を下りてふたたび平地などの水辺にやって来ます。

●よく似た種類

ナツアカネ：左の写真の矢印部分の形がちがう。



タイコウチ タイコウチ科



りつつある種



かな自然の象徴となる種

大きさ：3～3.8cm 観察時期：一年中

アメンボやコオイムシなどと同じ水中にすむカメムシの仲間、田んぼや水路、池や湿地、川の流れのゆるやかなところなどにすみます。前あしが大きくカマのような形をしていて、オタマジャクシや小魚、他の昆虫などをつかまえて、その体液を吸います。メスは水ぎわの土の中に産卵します。以前はふつうに見られましたが、最近ではあまり見られなくなりました。これは、すみかとなる池が開発などで失われたり、田んぼでの農耕技術が変わったり（あぜぬりをしない、作業の機械化など）、農薬によりエサとなる生きものが減ったり、川の改修で流れのゆるやかな浅い水辺が少なくなったりしたことなどが原因と考えられます。タイコウチはすみかの環境が悪くなると、水から出て飛び立ち、新しい場所に移動することができますが、残されたすみかは少なく、大阪府内では、山あいの地域に追いやられているようです。タイコウチがいたら、そこにはエサとなる生きものがたくさんいて、一年中安定した浅い水辺がある豊かな自然が残っているといえます。

●さがすポイント ★★

底に泥がたまっているところや、水草の多いところを好み、あまり水の深いところにはいません。

●よく似た種類

タガメ：タイコウチよりも大きく（4.8～6.5cm）。大阪府内では数がとても少ない。



クログンゴロウ ゲンゴロウ科

大きさ：2.2～2.4cm 観察時期：一年中



りつつある種

かな自然の象徴となる種

山あいの池や^{しつち}湿地、田んぼや流れのない水路などにすみます。成虫、幼虫ともに肉食性で、小魚、オタマジャクシ、他の水生昆虫などをつかまえて食べます。昔はふつうに見られましたが、^{すいせいこんちゆう}圃場整備で田んぼや水路のようすが変わったり、^{ほじょうせいび}農業や化学肥料による水のごれなどが原因で、クログンゴロウも減ってしまいました。幼虫は水中で生活し、水ぎわの^{しめ}湿った土にもぐってさなぎになります。羽化した成虫は水中で生活していますが、水から出て飛ぶこともできます。大阪府内では山あいの水草の生えたため池などに、細々とすんでいるようです。タイコウチと同じく、大型の肉食性の昆虫であるクログンゴロウは、エサとなる生きものがたくさんいる豊かな自然の象徴といえます。

●呼吸方法

水の中にすんでいます。魚のように水中にとけている酸素を利用することはできません。時々水面に上がって、前ばねの下に空気をため、そこから酸素を取りこんで呼吸します。

●さがすポイント ★★★

山あいにある水草の多い池などをあみですくってみましょう。ゲンゴロウの仲間は、後ろ足が左右同時に動くのが特ちょうです。

●よく似た種類

ガムシ：体型が紡すい形、後ろあしが左右バラバラに動く。



ミズワラビ ミズワラビ科

一年草 観察時期：4～11月（田んぼではイネ刈り後9～10月）

近畿：準絶滅危惧種 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類



りつつある種

浅い水中に生え、シダの仲間ではめずらしく1年草です。昔は田んぼや土でできた水路などにたくさん生えていました。近年では田んぼや水路のようすが変わり、ミズワラビが生える湿った環境はとてまもなくなくなってしまいました。また雑草を枯らす農薬（除草剤）が使われるようになったこともミズワラビが減った原因です。今ではミズワラビは山あいの地域でしか見られなくなってしまいました。ミズワラビが生えていたら、そこは年中湿った環境があることが分かります。

● 2種類の葉

シダの仲間は花をつけず、葉のうらに胞子をつくってふえます。ミズワラビの葉は肉厚でうすい緑色をし、短くて幅の広い葉（栄養葉とよばれるふつうの葉）と、細長く枝分かれした葉（胞子葉とよばれ、繁殖のために胞子をつくる葉）とがあり、一株にすがたのちがう2種類の葉がついています。

● さがすポイント ★★★


昔ながらの田んぼや土でできた素堀の水路などをさがしてみましよう。イネが生えている時期にはイネにかくれて見つけにくいかもしれませんが、イネ刈り後に出てくることもあるので、早くイネ刈りが終わった田んぼや休耕地が観察のねらい目です。

● よく似た種類
特になし。



アブラコウモリ ヒナコウモリ科

大きさ：5cm 尾の長さ：3～4.5cm

 とのかかわりが深い種

昼間は家屋のすき間などにすみ、夕方うす暗になるとねぐらを出て川の上などを飛び回るおなじみのコウモリです。一年を通して家屋を利用し、家屋のない山おくにはいません。屋根うらに糞がたまったりして人から迷惑がられることもあります。カヤユスリカなどを大量に食べて数を減らしてくれる大切な役割をしています。昆虫が少ない冬の間は冬眠します。アブラコウモリは、すみかとなる家屋と、エサとなる昆虫がたくさん発生する水辺があれば生きていけるので、市街地では増えているようです。コウモリという名は「川守」からつけられたといわれていて、水辺とのつながりが深い生きものであることが分かります。

● 超音波を出す

目はほとんど見えず、代わりに人には聞こえない高音（超音波）を発して、はね返ってきた音から、飛んでいる昆虫や障害物の位置を知ります。

● さがすポイント ★

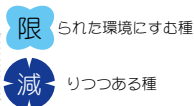
日没から30分くらいしたら、家屋などのねぐらから飛び出して、川など虫の多い水辺でエサをとります。

● よく似た種類

ヒナコウモリ：ふだんは木の洞にすんでいて、繁殖の時だけ家屋を利用することがある（木の洞や洞くつなどにすむコウモリは、開発などですみかが失われやすく、アブラコウモリとは反対に減りつつあります）。



コアジサシ カモメ科



限 られた環境にすむ種

減 りつつある種

大きさ：24cm なつどり 夏鳥 (4月～10月)

かんきょうしょう 環境省：絶滅危惧Ⅱ類 きんき 近畿：絶滅危惧種 大阪府：絶滅危惧Ⅱ類

春になると南の国から大阪にやって来て繁殖する夏鳥です。川や池、海の上空で羽ばたきながら空中停止をし、魚を見つけると急降下して水面の魚をつかまえます。繁殖場所は砂浜や川の中州、裸地などで、巣といっても何もなく、地面の上に直せつ、卵を産みます。

砂浜や川の中州は、うめ立てや改修工事などで失われつつあるため、今では大阪湾岸のうめ立て地や造成地で繁殖しています。2004～2005年には関空2期工事中の滑走路予定地で約1000羽が繁殖しました。しかし、これらの場所は工事が進むとなくなってしまうので、次の年にはまた別の場所をさがさなければなりません。このように、安定した繁殖場所が極めて少ないコアジサシは、国や大阪府から絶滅のおそれがある種として選ばれています。

●さがすポイント ★

夏には、池や川、海の上空で羽ばたき停止し、ダイビングして魚をつかまえるすがたがよく見られます。海辺に近い裸地では群れで休息しているのも多く見られます。

●よく似た種類

特になし。大阪府内で繁殖するカモメの仲間はこのコアジサシのみ。



林

草地や畑

川

池や湿地

田んぼや水路

市街地

山

里地

まち

キジバト ハト科

大きさ：33cm リゅうちょう 留鳥

分布 拡大中の種

かつてはヤマバトとよばれ、低い山の林にすんでいましたが、今では市街地でもふつうに見られるようになりました。本来は木の上に巣をつくりますが、最近では鉄骨などの人工物につくる例もふえてきました。巣は細い枝を集めた皿形です。キジバトは主に植物のタネを食べますが、ヒナが育つときには動物性のタンパク質が必要です。他の鳥はたいてい、ヒナのエサとなる昆虫などが最も多い春から初夏にかけてヒナを育てますが、ハトの仲間は、昆虫などの代わりに親鳥がミルクのような栄養豊富な液体（ピジョンミルク）をはき出してヒナに与えて育てるので、昆虫が多い時期に限らず一年中繁殖できます。

●ピジョンミルク

ピジョンミルクとは、親鳥ののどにある「そのう」とよばれる部分の内側の細胞がはがれたもので、動物性のタンパク質や脂肪、ビタミンなどが豊富に含まれています。ハトの仲間は、オスもメスも出すことができます。

●さがすポイント ★

1羽で林や植えこみの下などを歩いて
いるハトに注目（ほとんど群れにならな

い）。キジバトは羽にはっきりしたうるこもようがあります。また、冬に落葉した街路樹にかけられた巣もさがしてみましよう。

●よく似た種類

ドバト（カフラバト）：羽の色は黒っぽいものから白っぽいものまでいろいろある。もともとはヨーロッパから中央アジア、北アフリカなどに分布し、日本へ持ちこまれた外来種。



コゲラ キツツキ科

大きさ：15cm リョうちょう 留鳥

分布 拡大中の種

スズメくらいの大きさの、小さなキツツキの仲間です。木をくちばしでコツコツコツとつついて、木の表面や中、樹皮のすき間にいる昆虫を追い出して食べます。枯れ木とのかかわりが深い鳥で、枯れ木や太い枯れ枝に穴を開けて巣穴にし、ヒナを育てます。

コゲラは、かつては低い山から山地の林にすんでいましたが、1980年代から市街地へだんだん分布を広げてきました。今では都市公園でも見ることができ、繁殖もしています。

●さがすポイント ★★

コツコツコツと木をつつく音、「ギーッ」という鳴き声がしたらちかくにいます。

秋から冬にはシジュウカラやメジロなど数種類の小鳥からなる群れ(混群こんぐんといいます)に混じって林の中を移動していることもあります。冬にカラ類の混群に出会ったら群れのちかくをさがしてみましょう。

●よく似た種類

特になし。

●その他のキツツキの仲間

低い山の林には、緑色の羽根のアカゲラがすんでいて(留鳥)、冬にはアカゲラも見られます(冬鳥)。また、南部の金剛山や岩湧山、和泉葛城山など高い山の林にはオオアカゲラがすんでいます(留鳥)。アカゲラとオオアカゲラは赤、白、黒のはでな色をしています。これらはコゲラよりも体が大きなキツツキです。



ツバメ ツバメ科

大きさ：17cm 夏鳥（3～10月）

人とのかかわりが深い種

市街地でもふつうに見られますが、少しはなれると川や田んぼがあり、エサとなる昆虫が多く、巣材となる泥が集めやすいところで特に多く見られます。3月ごろ、東南アジアなど南の国から渡って来て、人家の軒下などに泥と草でおわん形の巣をつくりまわす。親鳥は飛びながら、大きな幅広いくちばしで昆虫をつかまえてせっせとヒナに与えます。ツバメはわざわざ人のちかくを選んで子育てをしますので、最も親しまれてきた夏鳥です。6月ごろから、親鳥と巣立ったヒナたちは河川敷のヨシ原に集団でねぐらをもちます。

●越冬ツバメ

秋になると、ほとんどのツバメはあたたかい南の国で冬をこすために旅立っていきませんが、そのまま日本に残って冬をこすツバメも少数います。

●さがすポイント ★

繁殖期はいうまでもありませんが、ヨシ原でのツバメのねぐら入りは各地で観察会が開かれています。大阪府内では淀川の河川敷（枚方市～高槻市）が大規模なねぐらになっていて、その

数は7～8月のピーク時には7000羽にもなります。

●よく似た種類

コシアカツバメ：ツバメよりやや大きく、腰が赤褐色。団地やビルなどにとっくり形の巣をつくる。

イワツバメ：スズメくらいの大きさ。尾羽が短く腰が白い。橋げたなどに巣をつくるが、大阪府内では分布が限られる。



シジユウカラ シジユウカラ科

大きさ：14.5cm リユウチョウ 留鳥

分布 拡大中の種

木の枝を移動しながら樹皮をはがしたり、地面に下りて落ち葉をひっくり返したりして昆虫を探します。他に、植物のタネや果実も食べます。秋から冬にかけては、ヤマガラやメジロなどと群れをつくるのがよくあります。これは混群とよばれ、エサを効率よく見つけるとともに、木々の葉が落ちて見通しのよい林内でタカなどの敵から身を守るためと考えられています。もともとは丘陵から山の雑木林にすむ鳥でしたが、1980年代から平地の市街地にも分布を広げ、最近では木の多い市街地の都市公園や庭などでも繁殖するようになりました。

●巣箱をよく利用する

木にできた洞や石がきのすき間、電柱などを利用してヒナを育てます。巣箱をかけてやるとよく利用する鳥のひとつで、市街地の公園にかけた巣箱も利用することがあります。シジユウカラに巣箱を使ってもらいたければ、入口の穴の大きさは直径2.8cmにします（これより大きいとスズメが入りません）。

●さがすポイント ★

胸からおなかにかけて黒いネクタイのようなすじがあるのが特ちょうです。オスは春には木のでっぺんなど目立つところにとまって、「ツーピーツーピー」とさえずります。

●よく似た種類

ヒガラ：シジユウカラのようなネクタイもようはヒガラにはない。主に山にすんでいて、冬には平地の都市公園にやってくることもある。



林

草地や畑

川

池や湿地

田んぼや水路

市街地

山

里地

まち

メジロ メジロ科

大きさ：11.5cm リョうちょう 留鳥



拡大中の種

かつては、平地から低い山の林にすんでいて、市街地では見られませんでした。1980年代から市街地へ分布を広げてきました。今では街路樹や庭先すの木でも、巣をつくってヒナを育てています。

主に昆虫や木の実、樹液などを食べます。市街地の公園や人家の庭などにもよくやって来て、冬にはミカンを半分に切って木にさしておくとよく食べます。他に、ツバキやサザンカの花のみつすを吸いますが、その時に体についた花粉を次の花に運んで受粉させる役割をしています。冬にはカラ類の混群こんぐんといっしょに見られることがあります。

● つり巣をつくる

4～7月ごろ、直径7～8cmのコップ形の小さな巣を、木の細い枝先えださきにぶら下げるようにつくりヒナを育てます。この巣は「つり巣」とよばれ、表面は緑色のコケなどでおおわれていて、青葉がしげっている時期にはなかなか見つけられません。冬に落葉した林の中ではよく目立ちます。

● さがすポイント ★


冬にツバキやサザンカの花がさいているところ、カラ類の混群、街路樹にかけられたつり巣などをさがしてみましよう。

● よく似た種類 特になし。



スズメ ハタオリドリ科

大きさ：14.5cm リゅうちょう 留鳥

 とのかかわりが深い種

市街地から農耕地^{のうこうち}まで、人家があるところでは一年中ふつうに見られます。逆に、人が住んでいない山^{やま}おくにはいません。もし、山の中で迷ってもスズメを見かけたら、ちかくに人家があると分かるほどです。スズメは、人家の屋根のすき間や電柱の付属物^{ふぞくぶつ}などによく巣をつくります。春から夏には昆虫^{こんちゅう}をよく食べるので、人里^{にんり}近くの林にいることも多いのですが、秋になると田んぼにやって来てコメを食べます。そのため、農家の人から害鳥あつかいされることもあります。一方では、害虫や雑草のタネをたくさん食べてくれる鳥でもあります。また、地方によってはスズメを焼き鳥にして食用にすることもあります。

●さがすポイント ★

人家のまわりではさがすまでもなく、ふつうに見られます。夜には集団をつくり、大きな木や竹林をねぐらにします。

●よく似た種類

ニユウナイスズメ：主に山の方にすむスズメの仲間。数は少ないが、秋から春にかけて群れで草地や農耕地にもやって来る。スズメのほお（耳羽^{みみはね}とよばれる部分）にある黒斑^{くろはん}が、ニユウナイスズメにはない。



ニユウナイスズメ



ムクドリ

ムクドリ科

大きさ：24cm リゅうちよう 留鳥

人 とのかかわりが深い種

スズメと同じく、市街地、のうこうち農耕地、人里近てんちゆうくの林など、人家のちかくに一年中すんでいます。主に地面を歩いて昆虫を食べる他、木の実は食べます。4～6月ごろ、人家の屋根のすき間や電柱などを利用してヒナを育てます。群れでいることが多く、よく電線や大木などに並んでとまっています。集団でねぐらをつくり、「キュルキュル、リユーリユー」などとさわがしく鳴きます。



夕方、電線にびっしりとまったムクドリの群れ

●さがすポイント ★

市街地や農耕地などで地面をトコトコ歩いている鳥や、電柱に群れでとまっている鳥がいたら注意しましょう。飛んだとき、腰が白いのも特ちょうです。

●よく似た種類

コムクドリ：春と秋の渡りわたりの時期に、ムクドリの群れに混まじっていることがある。



ニホンヤモリ ヤモリ科

大きさ：10～12cm

人 とのかかわりが深い種

人家にすむ代表的な動物です。主に関東地方以南の人家とそのまわりにすみ、人里はなれた場所ではほとんど見られません。指のうら側に細かいひだ（指下板とよびます）があり、かべや天井、まどガラスも自由に歩きまわります。肉食性で、主に昆虫やクモなどを食べます。人家にいてゴキブリなどの害虫を食べてくれるので、漢字では「家守」「守宮」などと書き、昔から親しまれてきました。メスは5～8月に、かべのすき間や戸袋（雨戸をしまうところ）、タンスのすき間などに、豆つぶのような卵を1回に2個、年1～2回産みます。



ヤモリの仲間の卵

●さがすポイント ★

夜、家の外の電灯や自動販売機など明かりのそばをさがしてみましよう。光に集まる昆虫を待ちぶせしていることがよくあります。

●よく似た種類

タワヤモリ：南部の海岸ぞいの地域にいるが、数は多くない。人家にはおらず、岩のすき間などにすむ。



林

草地や畑

川

池や湿地

田んぼや水路

市街地

山

里地

まち

ウスバキトンボ トンボ科

大きさ：4.5cm 観察時期：4月～11月

分布 拡大中の種

平地から低い山までもっともよく見られるトンボのひとつです。南のあたたかい地方に多いトンボで、冬の寒さは苦手です。幼虫の成長はエサの量と水温に左右されますが、他のトンボと比べて早く、夏には卵からかえって羽化するまで一ヶ月ちょっとともいわれています。幼虫はエサと水温さえあれば単純な環境でも生きることができ、成長が早いこともそのような環境を生きぬくことができる理由の一つでしょう。成虫は、長距離を移動する習性があり、毎年春に東南アジアから海を渡って日本へやって来ます。そして世代をくり返しながらどんどん北へ向かいます。

●北へ向かう理由

ウスバキトンボの幼虫は日本の寒い冬をこすことができずに死んでしまいます。それでも毎年春に、南の方から成虫がやって来るのは、昆虫が分布を広げる方法のひとつと考えられます。うまくいけば、そのうち日本で冬をこすウスバキトンボが出てくるかもしれません。

●さがすポイント ★

成虫は、田んぼや広場などで群れて飛んでいます。幼虫は、池や田んぼの他、都市公園のふん水、学校のプールなどでも見られることがあります。

●よく似た種類

ショウジョウトンボ：若い個体は黄色っぽく、よく似ている。



カネタタキ カネタタキ科

大きさ：1～1.4cm 観察時期：8～11月

まちから低い山まで、あまり場所を選ばずに広く見られる小さなコオロギの仲間です。公園や庭の生けがき、やぶや林のへりなどの、主に低い木の上にすんでいます。オスは頭と胸（前胸部）の一部が赤褐色で白い帯があり、短いはねがありますが、メスは全身が褐色ではねがありません。そのため、地面の上を歩いて移動します。さがしてみるとけっこう身近にいる昆虫で、家の中にもよく入ってきます。

●鳴くのはオス

カネタタキを含め、コオロギやキリギリスの仲間は鳴く虫として知られますが、鳴くのはオスだけで、メスは鳴きません。また、メスの腹部の先には長い産卵管があるのが特ちょうです。

に巻きついたツル植物の枯れ葉の中や、かべをはうツタの葉の間、セミのぬけがらの中に入っていることもあります。

●よく似た種類

アシジマカネタタキ、イソカネタタキ：南部の海岸ぞいの地域で見られる。

●さがすポイント ★

昼間から小さな声で「チン、チン、チン」とお坊さんがたたく仏具の鉦の音のように鳴きます。耳をすまして、鳴き声をたよりに低木の下にあみをうけて木をたたくと、あみの中に落ちてきます。すき間に入りこむのが好きな昆虫で、フェンス



クマゼミ セミ科

大きさ：4～4.8cm 観察時期：6～8月

分布 拡大中の種

林

草地や畑

川

池や湿地

田んぼや水路

市街地

山

里地

まち

8月ごろに主に平地でさかんに鳴く大型のセミです。南のあたたかい地方に多いセミで、最近市街地でふえています。乾燥化と高温に強いようで、大阪のような大都市の中心（例えば梅田）でも多数発生し、夏には大合唱します。最近では分布をどんどん東へ広げ、関東地方の内陸まで進出しています。以前は午前中にだけ鳴き声が聞かれましたが、最近、特に市街地では午後にも聞かれます。クマゼミのメスは枯れ枝に産卵するので、公園などの枯れ枝がきれいに整理されると、クマゼミも少なくなります。

大阪府内のいろいろな都市公園でセミのめげがら^{ちようさ}が行われており、そのほとんどではクマゼミが最も多く確認されています。ただ、大阪市の鞆公園（p123）では例外的にアブラゼミが最も多く、クマゼミは約4割あまりだそうです。

●ウシカメムシ

ウシカメムシはクマゼミの卵の汁を吸^すう昆虫です。クマゼミがふえるにつれてウシカメムシも最近ふえています。クマゼミといっしょにさがしてみましよう。

●さがすポイント ★

夏の市街地では、あちこちの木で見られます。

●よく似た種類

特になし。



ナガサキアゲハ アゲハチョウ科

大きさ：6～7cm 観察時期：5月上旬じょうじゆん～10月中旬

分布 拡大中の種

日当たりのよい場所を好み、市街地や里山でも見られます。ナガサキアゲハは南のあたたかい地方に多いチョウで、近年、北へ分布ぶんぷを拡大しています。もともと近畿地方にはいませんでしたが、1980年代に入ってから見られるようになりました。この分布拡大は1940年代後半から始まったといわれています。最近では地球温暖化ちきゅうおんだんかが、この原因の一つになっていると考えられています。

ナガサキアゲハがすむには、あたたかい気候と、幼虫のエサとなるカラタチやミカン科の木、成虫が蜜を吸うツツジ、ネムノキなどの花が必要です。

●さがすポイント ★★

夏にはクサギの花によく集まります。ナガサキアゲハははねのつけ根にあざやかな赤色の紋があることと、ふつう後ばねに細長く飛び出した部分びじょうとつき（尾状突起とよびます）がないことで、他の黒いアゲハチョウの仲間とかんたんに見分けることができます。また、ナガサキアゲハの幼虫は腹部ふくぶの帯が白いのが特ちょうです。

●よく似た種類

カラスアゲハ、クロアゲハ：後ろばねに長く飛び出した部分（尾状突起）がある。



ツマグロヒョウモン タテハチョウ科

大きさ：3.2～4cm 観察時期：4月下旬～11月中旬

分布 拡大中の種

人 とのかかわりが深い種

河川敷、田んぼや畑、人家のまわりの空き地など明るく開けた環境にすみます。最近特に市街地でよく見られるようになったチョウです。これは、幼虫が日本に昔からある野生のスミレ科の植物の代わりに、市街地に多いパンジーやピオラなど同じスミレ科の栽培植物を主なエサとして利用するようになったためです。ツマグロヒョウモンは、もともと南の地方に多く、あたたかい気候を好むチョウです。ふえつつある原因として、地球温暖化の影響ともいわれていますが、パンジーなどの栽培植物に幼虫がくっついて、人に運ばれてきているともいわれています。本当のところはよく分かっていませんが、エサと気温さえあれば、市街地の環境にもすむことができるたくましいチョウといえます。



ツマグロヒョウモンの幼虫

●さがすポイント ★

成虫は年に4～5回発生するので、長い期間見ることができます。スミレ科の花のまわりをさがしてみましょう。

●よく似た種類

ミドリヒョウモン：主に山にいて、秋にはまれに平地でも見られる。成虫はやや大きく、後ろばねのうらは緑色で、たての帯もようがある。



クスノキ クスノキ科

じょうりよくじゆ
常緑樹 高さ 20m 以上 花期：5～6月 実：10～11月

人 とのかかわりが深い種

とても大きくなる木で、幹の直径が2 m以上、高さが30 m以上になることもあります。もともとはあたたかい地方に多く、照葉樹林に生えますが、神社やお寺、公園などあちこちに植えられています。みなさんの学校にも植えられているかもしれません。冬でもつやつやした葉をつけ、葉をさわるとクスノキ科に特有の香りがします。この葉は春になって新しい葉が大きくなると、いっせいに落葉します。クスノキの樹皮を原料に「樟脳」という防虫剤がつくられ、害虫から着物などを守るために家庭で使われてきました。

●クスノキにつく昆虫 こんちゆう

クスノキにつく昆虫の種類は少ないのですが、その代表的なものにアオスジアゲハがいます。主に市街地の公園などに植えられたクスノキの葉が幼虫のエサとなり、アオスジアゲハは林よりも市街地で多く見られます。他に、クスアナキゾウムシも見られます。

●さがすポイント ★

照葉樹林、ちんじゆ鎮守の森や社寺林、公園などをさがし、葉をさわって香りをかいてみましょう。



クスノキの葉



ナズナ アブラナ科

一年草 花期：3～6月

人 とのかかわりが深い種

農耕地のまわり、道ばたなどやや荒れた土地に生えます。「ペンペン草」という別名でも親しまれてきました。これは実の形がしゃみせんのパチに似ていることからつけられた名で、ナズナが荒れた土地に生えることから、荒れはてたようすを例えて「ペンペン草が生える」とか、何も残っていないようすを例えて「ペンペン草も生えない」などといわれます。またナズナは古くから食用にもされ、正月7日に無病息災を願って食べる七草がゆには、ナズナやセリなど食べられる春の七草が使われます。冬の間は葉を地面にぴったりとつけて広げ、寒さをしのぐとともに、少ない太陽の光を効率よく浴びて、根に養分をたくわえています。そして春になると株の真ん中から長い茎を伸ばして白い小さな花をさかせます。

●春の七草

セリ、ナズナ、ゴギョウ（ハハコグサ）、ハコベラ（ハコベ）、ホトケノザ（コオニタビラコ）、スズナ（カブ）、スズシロ（ダイコン）

（ ）内が今の呼び方（標準和名）。
今でいうホトケノザは別の植物。

●さがすポイント ★

道ばたなどごく身近なところに生えているので、特ちょうがある実の形をたよりにさがしてみましよう。

●よく似た種類

グンバイナズナ、マメグンバイナズナ、タネツケバナ



スミシ スミシ科

多年草 花期：3月下旬～6月

人 とのかかわりが深い種

田んぼや畑のまわり、川の土手、道ばた、住宅地など日当たりのよいところに生える身近な植物です。スミシはあちこちに少しずつパラパラと生えることが多く、たくさんかたまって生えていることはあまりありません。コンクリートの割れ目など、わずかなすき間から生えていたりしますが、これは主にアリによって巣に運ばれたタネが発芽したものといわれています。

スミシの仲間は種類が多く、生えている場所もさまざまです。中でも人里ちかくに生えるこのスミシの花は、むらさき色を「すみれ色」ともいうように、昔から人々に親しまれてきました。

●さがすポイント ★

花がさく春に、田んぼや畑のまわり、川の土手、道ばた、道路のコンクリートの割れ目などをさがしてみましよう。スミシの葉は長いへら形で、葉柄に翼とよばれる出っ張りがあるのが特徴です。



●よく似た種類

ヒメスミシ：日当たりがよく、乾きぎみのところに生える。特に市街地の庭や墓場などに多い。葉柄には翼はほとんどない。



カンサイタンポポ キク科

多年草 花期：4～5月



りつつある種

名前のとおり、昔から関西地方に多いタンポポの仲間です。田んぼや畑のまわり、川の土手、道ばたなどでふつうに見られます。以前は大阪府内でタンポポといえばこのカンサイタンポポのことでしたが、最近では市街地を中心にヨーロッパ原産のセイヨウタンポポがふえています。セイヨウタンポポの方が市街地の環境に適しているようで、カンサイタンポポはどちらかというとき里地に多く見られます。また、カンサイタンポポとセイヨウタンポポはよく似ていて、雑種をつくるのがよくあり、両方が生えている地域では雑種がふえて純粋なカンサイタンポポがなくなってしまうかもしれないと問題になっています。



カンサイタンポポ (左)
セイヨウタンポポ (右)

●さがすポイント ★

カンサイタンポポは里地に多く見られますが、地域によっては市街地にも多く残っています。一株見つけたらそのまわりにも仲間をさがしてみましよう。

●よく似た種類

セイヨウタンポポ：がく片が外側に反り返る。

外来生物問題

「外来生物」とは、人によって外国から日本に持ちこまれた生きものをさします。これに対し、もともと日本にいる生きものは「在来生物」とよびます。外来生物が持ちこまれる経緯はさまざま、飼育や栽培、魚つりのように目的があって持ちこまれるものもあれば、外国からの荷物にまぎれていたり、船底にくっついていたりして人が気づかないうちに日本に持ちこまれるものもあります。**いづれにしても、人の活動が原因です。**外来生物の中には、持ちこまれた先で定着・繁殖し、次のような問題を引き起こす種があります。

外来生物が引き起こす主な問題

- 在来生物を捕食する・・・オオクチバス、ブルーギル (p91) など
- よく似た場所にすむ在来生物のすみかをつぼう (またはそのおそれがある)・・・カタヤシ (p92)、ソウシチヨウ など
- 近縁の在来生物と雑種をつくってふる・・・セイヨウタンポポ (p115)、タイリクバラタナゴなど

これらの問題を防ぐため、2005年に「外来生物法*」が施行され、外来生物の中でも日本の生態系に被害を及ぼす種**の輸入や販売、飼育、栽培、受け渡しなどが原則禁止されました (このページでは法律の対象となる種の種名に下線を引いています)。

私たちにできること (外来生物被害予防3原則より)

外来生物を

1. おやみに日本に**入れない**
2. 飼っている外来生物を野外に**すてない**
3. 野外にすてにる外来生物を他の地域に**拡げない**



オオクチバス



ウシガエル



アライグマ



スクミリンゴガイ (卵塊)



(親貝)



ポタンウキクサ

* 正式には「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」といいます。

** 「特定外来生物」として国によって指定されています。

Ⅲ．大阪の自然

大阪の自然と、地域ごとの特ちょうを解説しています。地域ごとに注目すべき貴重な自然や、身近な自然観察場所も紹介しています。

- 大阪の自然
- 地域の特ちょう 北部／中部／南部

大阪の自然

大阪府は面積が約 1894km²で全国で 2 番目に小さいながら、人口は約 880 万人で全国で 3 番目に多い都道府県です。北、東、南の三方を山に囲まれ、西は大阪湾にのぞんでいます。中央部には平野が広がり、その大部分は市街地化されています。林や農地、川から海にいたるさまざまな自然環境には多くの生きものがすみ、それらはおたがいにかわり合いながらくらしています。しかし、近年急速に進んだ市街地化の影響を受けて、多くの生きものの生息場所が失われつつあります。

下の表「大阪の生きもの」は、大阪府に生息する生きものの種数*と、そのうち絶滅のおそれがある種などとして大阪府レッドデータブック (RDB) に取りあげられている種数とその割合を示したものです。これを見ると、両生類や虫類をはじめ、多くの生きものがその数や生息場所を減らしつつあることが分かります。このような大阪の自然の状態を、私たちひとりひとりが知って、守っていかねばなりません。

表 大阪の生きもの

分類	大阪府に生息する 生きものの種数*	大阪府 RDB で取り あげている種数	%
ほ乳類	33	14	42
鳥類	365	112	31
は虫類	20	9	45
両生類	18	11	61
淡水魚類	130	54	42
昆虫類	5,567	186	3
陸産・淡水産貝類	156	59	38
植物	2,436	451	19
合計	8,725	896	10

*大阪府野生生物目録 (平成 12 年発行) の種数を採用。ただし、これには海の生きものや甲殻類、貝以外の軟体動物などは含まれていません。また、種数は変化するものですので、ひとつの目安と考えて下さい。

表 大阪府レッドデータブックの区分

区分	定義
絶滅	大阪府ではすでに絶滅したと考えられる種
絶滅危惧	絶滅の危機 にひんしている種
	絶滅の危険 が増大している種
準絶滅危惧	存続基盤がぜい弱な種 (生息状況の移り変わりから見て、種の存続への圧迫が強まっている種)
情報不足	評価 するだけの情報が不足している種
要注目	注目を要する種



(大阪府みどりの^{げんきようちようさ}現況調査、市街化区域より作図)

地域の特ちょう

北部

里山環境がよく残されている地域

北部は淀川よりも北の地域で、面積の約2/3を北摂山系が占めています。北摂山系は兵庫県や京都府につながっていて、最も高い深山とそれに次ぐ剣尾山の標高は800m弱、その他に三草山、妙見山、竜王山、ポンポン山など400～700mくらいの高さの山があります。夏はすずしくて雨が多く、冬は寒くて雪が多いのが特ちょうです。山地の南側には千里丘陵があり、平地へとつづいていますが、これらは都心のベッドタウンとして広く市街地化されています。



【北部を代表する自然】

●里山の雑木林

能勢町をはじめ、この地域の山林は、里山として昔から人の生活に利用されてきた雑木林が中心です。かつて炭焼きが盛んだったので、炭に利用するクヌギやコナラ、アベマキなどが多く見られます。オオムラサキ、オオクワガタなどの雑木林に特有の生きものも多く見られます。モリアオガエルやニホンジカがすんでいるのは、大阪では北摂山系だけです。



●明治の森箕面国定公園（箕面市）

箕面の山は生きものの種類が豊富な場所として知られています。箕面公園には昆虫館もあり、自然観察の拠点となっています。また、箕面の山にはニホンザルがすんでいることでも有名です。秋には紅葉の名所としてたくさんの人が訪れます。



ニホンザル

●三草山（能勢町）
みくさやま のせちょう

三草山は、今も里山の環境が残る府内では貴重な場所です。三草山の雑木林には落葉広葉樹が多く、それをエサとするゼフィルス（ミドリシジミ類）が10種もすんでいます（ゼフィルスは日本に25種、府内に14種しかいません）。府民参加の保全活動が行われています。



ヒロオビミドリシジミ

●地黄湿地（能勢町）
じおうしつち

面積約1ヘクタールの府内最大の湧水湿地です。食虫植物のモウセンゴケや日本で最も小さいハッチョウトンボなど、湿地特有の生きものの宝庫となっています。湿地は放っておくとまわりから土砂が入ったり、木が生いしげったりしてようすが変わってしまうので、湿地を維持するための保全活動が行われています。



ハッチョウトンボ

●万博記念公園（吹田市）
ばんぱくきねんこうえん すいたし

1970年に開催された日本万国博覧会の跡地につくられた公園です。万博開催当時にたくさん建てられていた展示場などを撤去したあとに木を植えてつくられた林は、今では立派な林になっています。



万博記念公園の林

中部

最も市街地化が進んだ地域

中部は淀川と大和川にはさまれた地域で、府内で最も市街地化が進んでいます。しかし、平野部には大阪を代表する河川、淀川が流れています。また東側には生駒山地の飯盛山、生駒山、高安山などが連なり、奈良県との境になっています。



【中部を代表する自然】

● 淀川

淀川は琵琶湖から流れ出していて、日本で最も淡水産の魚貝類が多い水系のひとつです（琵琶湖水系とよびます）。

淀川の下流には「わんど」とよばれる池のような場所があり、天然記念物のイタセンパラがすんでいます。また、河口ちかくの汽水域（海水と淡水が混ざるところ）の岸边には広いヨシ原がひろがり、オオヨシキリなどの野鳥が多く見られる他、ヤマトオサガニなどさまざまなカニや、瀬戸内海沿岸では淀川だけに見られるヒヌマイトトンボもすんでいます。



イタセンバラ



ヤマトオサガニ ヒヌマイトトンボ



●^{こんこういごまきせんこくていこうえん}金剛生駒紀泉国定公園

生駒山地の大阪側はわりと急な斜面、奈良側はゆるやかな斜面になっています。大阪側の斜面は、北部地域ほどではありませんが、雑木林がよく残っていて、オオムラサキやミドリシジミ類も見られます。



●^{なんこうやちようえん じんこうひがた}南港野鳥園の人工干潟（大阪市）

南港のうめ立て地につくられた人工干潟です。春と秋には渡り途中のシギやチドリが羽を休める場所となっていて、冬にはカモの仲間など多くの水鳥が見られます。小鳥をねらって、ハヤブサが現れることもあります。

●^{おおさかじょうこうえん}大阪城公園（大阪市）

大阪の中央に位置し、大阪城を囲む都市公園で、総面積は106.7ヘクタールもあります。広くて木も多いため、昆虫や野鳥のよい観察ポイントになっています。



●^{うつぼこうえん}鞆公園（大阪市）

1955年に開園して50年たったので、木も大きくなり、3.9ヘクタールの東園は立派な林になっています。最近、都市公園で見られるセミの種類は、ほとんどがクマゼミですが、鞆公園は大阪市内では唯一、クマゼミよりアブラゼミの方が多く見られます。

南部

照葉樹林から冷温帯のブナ林までの 多様な林

南部は大和川より南の広い地域で、東側には金剛生駒山系の二上山、大和葛城山、金剛山、南側には和泉葛城山系の岩湧山、三国山、和泉葛城山とつづきます。最も高い金剛山は、標高が1125 mあります（山頂は奈良県）。また、平野部は海に広く面していて、雨が少なく、あたたかい気候が特ちょうです。



【南部を代表する自然】

●大和川

大和川は奈良盆地から大阪平野へと人口の多い地域を流れるので、かつては全国でも水のごよれのひどい川として知られていましたが、そのころと比べると今ではずいぶんきれいになってきました。支流の石川上流には溪流が見られます。



干潟

●男里川河口（泉南市・阪南市）

大阪では数少ない自然の干潟があり、水鳥が集まる他、ハクセンシオマネキという希少なカニもすんでいます。



ハクセンシオマネキ

● 信太山湿地 (和泉市)

信太山は自衛隊の訓練施設として利用されてきたため、自然環境が宅地開発などから守られてきました。草原性のウスバカマキリなどの昆虫や、湿地性のサギソウなどの植物が見られます。



サギソウ

● 平野部のため池群

雨が少ない気候なので、山地のふもとから平野にかけて多くのため池がつくられ、農地に水を供給してきました。近年は宅地開発などでため池の数はずいぶん減りましたが、一部にはオニバスやジュンサイなどの水生植物や、ナニフトンボなど希少な昆虫がすみ、自然観察によい池も残っています。



● 金剛・葛城山地

標高が 900 ~ 1000 m 以上もある、府内では最も高い山々が連なっています。そのためずいしい地方 (冷温帯) を代表するブナ林をはじめ、レンゲツツジ群落などがあり、保護されています。ブナ林にはコルリクワガタやエゾハルゼミなど特有の昆虫もすんでいます。



資料

危険な生きもの

●さわるとかぶれる生きもの



ウルシの仲間 (写真はハゼノキ)

里地から山に生える。葉のつき方が特ちょう的で、秋には紅葉する。さわると広くかぶれる。



チャドクガ (幼虫)

幼虫をさわると毒毛が皮ひにささる。幼虫はチャノキやツバキ、サザンカなどの葉につく。



(成虫)

●刺したり咬んだりする生きもの



スズメバチの仲間 (写真はオオスズメバチ)

腹部の先にある毒針で刺す。特に夏の終わり～秋には巣が大きくなり、凶暴になるので巣に近づかないこと。巣をつくる場所は種類によってちがいが、地中や木の洞、軒下、屋根うらなどにつくる。



アシナガバチの仲間 (写真はセグロアシナガバチ)

腹部の先にある毒針で刺す。軒下や石垣などにある巣を刺激しないこと。



毒ヘビの仲間 (写真はマムシ)

田んぼのまわりや林などにすむ毒ヘビ。見つけても近づかないこと。また、いそむところには長づつをはいていくと安心。その他ヤマカガシ (p87) にも注意。



セアカゴケグモ

オーストラリアや東南アジアに分布する毒グモ。主に市街地で見られ、排水溝や自動販売機のうらなどにいる。おとなしいが、咬まれると危険なのでさわらない。

大阪の環境指標種一覧

	種名	科名	環境の種類		種名	科名	環境の種類
《ほ乳類》				50	オオゴキブリ	オオゴキブリ	林
1	アブラコウモリ	ヒナコウモリ	市街地	51	オオカマキリ	カマキリ	草地や畑
2	カヤネズミ	ネズミ	草地や畑	52	エンマコオロギ	コオロギ	草地や畑
3	テン	イタチ	林	53	スズムシ	スズムシ	草地や畑
《鳥類》				54	マツムシ	マツムシ	草地や畑
4	カイツブリ	カイツブリ	池や湿地	55	カネタタキ	カネタタキ	市街地
5	カワウ	ウ	池や湿地	56	キリギリス	キリギリス	草地や畑
6	アマサギ	サギ	草地や畑	57	トノサマバッタ	バッタ	草地や畑
7	オオタカ	タカ	林	58	クマゼミ	ゼミ	市街地
8	サシバ	タカ	林	59	ミンミンゼミ	ゼミ	林
9	キジ	キジ	草地や畑	60	ニイニイゼミ	ゼミ	林
10	イカルチドリ	チドリ	川	61	ヒグラシ	ゼミ	林
11	ケリ	チドリ	草地や畑	62	タイコウチ	タイコウチ	田んぼや水路
12	チュウシャクシギ	シギ	川	63	オオサムシ	オサムシ	林
13	コアシサシ	カモメ	市街地	64	クロゲンゴロウ	ゲンゴロウ	田んぼや水路
14	キジバト	ハト	市街地	65	オオクワガタ	クワガタムシ	林
15	カフゼミ	カフゼミ	川	66	オオセンチコガネ	センチコガネ	林
16	コグラ	キツツキ	市街地	67	ヒメボタル	ホタル	林
17	ヒバリ	ヒバリ	草地や畑	68	ゲンジボタル	ホタル	川
18	ツバメ	ツバメ	市街地	69	キアゲハ	アゲハチョウ	草地や畑
19	セキセイ	セキセイ	川	70	ナガサキアゲハ	アゲハチョウ	市街地
20	オオヨシキリ	ウグイス	草地や畑	71	アサギマダラ	マダラチョウ	林
21	セッカ	ウグイス	草地や畑	72	ツマグロヒヨウモン	タテハチョウ	市街地
22	シジュウカラ	シジュウカラ	市街地	73	オオムラサキ	タテハチョウ	林
23	メジロ	メジロ	市街地	74	ジャンメチョウ	ジャンメチョウ	草地や畑
24	スズメ	ハタオリドリ	市街地	《陸産貝類》			
25	ムクドリ	ムクドリ	市街地	75	クチペニマイマイ	オナジマイマイ	林
26	カウス	カラス	林	《淡水産貝類》			
《は虫類》				76	カフニナ	カフニナ	川
27	ニホンイシガメ	イシガメ	池や湿地	77	マシジミ	シジミ	川
28	ニホンヤモリ	ヤモリ	市街地	《シダ植物》			
29	ヤマカガシ	ヘビ	田んぼや水路	78	フラビ	コバノイシカグマ	草地や畑
《両生類》				79	ミズフラビ	ミズフラビ	田んぼや水路
30	オオサンショウウオ	オオサンショウウオ	川	80	クサソテツ	メシタ	草地や畑
31	アカハライモリ	イモリ	田んぼや水路	《種子植物》			
32	ニホンアカガエル	アカガエル	田んぼや水路	81	アカマツ	マツ	林
33	トノサマガエル	アカガエル	田んぼや水路	82	ツブラジイ	ブナ	林
34	モリアオガエル	アオガエル	池や湿地	83	ブナ	ブナ	林
35	カジカガエル	アオガエル	川	84	コナラ	ブナ	林
《淡水魚類》				85	エノキ	ニレ	林
36	ギンブナ	コイ	川	86	クスノキ	クスノキ	市街地
37	カワムツ	コイ	川	87	ジュンサイ	スイレン	池や湿地
38	タモコ	コイ	田んぼや水路	88	オニバス	スイレン	池や湿地
39	シマドジョウ	ドジョウ	川	89	ツバキ	ツバキ	林
40	メダカ	メダカ	田んぼや水路	90	モウセンゴケ	モウセンゴケ	池や湿地
《甲殻類》				91	アブラナ	アブラナ	市街地
41	スジエビ	テナガエビ	川	92	スミレ	スミレ	市街地
42	サワガニ	サワガニ	川	93	ヒシ	ヒシ	池や湿地
43	モクズガニ	イワガニ	川	94	ツリガネニンジン	キキョウ	草地や畑
《昆虫類》				95	カンサイタンポポ	キク	市街地
44	ハグロトンボ	カワトンボ	川	96	ショウジョウバカマ	コリ	林
45	ギンヤンマ	ヤンマ	池や湿地	97	ヒガンバナ	ヒガンバナ	草地や畑
46	ウスバキトンボ	トンボ	市街地	98	チガヤ	イネ	草地や畑
47	チョウトンボ	トンボ	池や湿地	99	ススキ	イネ	草地や畑
48	アキアカネ	トンボ	田んぼや水路	100	ヨシ	イネ	草地や畑
49	ナニウトンボ	トンボ	池や湿地				

フィールドノートの使い方

生きものを観察するときには、まわりの環境^{かんきょう}もあわせて観察することが大切です。II章では、生きものの種類ごとに、その生活のようすと、必要とする環境^{かんきょう}を解説してきました。これを参考に、次のページのフィールドノートをつかって、自分だけの観察記録をつくり、生きものと環境とのかわりを考えてみましょう。

【記入例】

◆フィールドノートNo. (1)		*コピーして使ってください
2007年 6月 1日 天気(はれ)		
場所	みのお ^① 町・村	みのお公園
見つけた生きもの	モリアオガエルとその卵がい	
見つけた場所の環境	山の中にある小さな池	
まわりの環境	林に囲まれている	
生きものや環境のようす (メモやスケッチ)		
生きものに必要で環境の条件 (エサや産卵場所などを本で調べて書きこもう)	<ul style="list-style-type: none"> ○ふだんは林の木の上で生活している産卵のときには池にやってくる。 → 林と池のつながりが必要。 ○昆虫などを食べる。 	同じ場所で見つけたほかの生きもの
		<ul style="list-style-type: none"> ○オオシオカラトビ ○いろんなヤブ ○マツモムシ

！フィールドノートは、観察したすべての生きものについて書く必要はありません。1種類でも2種類でも、じっくりと観察して記録してみましょう。

年 月 日 天気 ()

場所 市・
町・村

見つけた生きもの

見つけた場所の環境^{かんきょう}

まわりの環境

生きものや環境のようす (メモやスケッチ)

生息に必要な環境の条件 (エサや産卵場所などを本で調べて書きこもう)^{せいそく} ^{さんらん}

同じ場所で見つけた
他の生きもの

観察会や保全活動に参加する

大阪府内で自然観察や保全活動を行っている主な機関・団体等（順不同）

●財団法人 大阪みどりのトラスト協会

〒540-0007 大阪市中央区馬場町3番35号

TEL: 06-6949-5705 FAX: 06-6949-5707 URL <http://www.ogtrust.jp/>

●財団法人 大阪府みどり公社

〒541-0054 大阪市中央区南本町二丁目1番8号

TEL: 06-6266-1038 URL <http://www.osaka-midori.jp/mori/>

●大阪府環境農林水産総合研究所 水生生物センター

〒572-0088 寝屋川市木屋元町10-4

TEL: 072-833-2770 FAX: 072-831-0229

URL <http://www.epcc.pref.osaka.jp/afr/fish/fish.html>

●大阪府営箕面公園昆虫館

〒562-0002 箕面市箕面公園1-18

TEL: 072-721-7967 FAX: 072-721-7655

URL <http://www.pref.osaka.jp/ikedo/insect/index.html>

●大阪市立自然史博物館

〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23

TEL: 06-6697-6221 FAX: 06-6697-6225 URL <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/>

●社団法人 大阪自然環境保全協会

〒530-0015 大阪市北区中崎西2-6-3 パステル1-201

TEL: 06-6374-3376 FAX: 06-6374-0608 URL <http://www.nature.or.jp/>

●万博記念公園 自然観察学習館

TEL: 06-6877-6923（開館：10:00～16:00 公園と異なる）

●日本野鳥の会 大阪支部

〒543-0011 大阪市天王寺区清水谷町6-16 NEXT21 1階

TEL: 06-6766-0055 FAX: 06-6766-0056

URL <http://www10.plala.or.jp/birdsosaka/>

さくいん

() 内はⅡ章で写真を使ってかんたんに紹介した種と、「危険な生きもの」に取りあげた種

ア (アオマツムシ)	48	クマゼミ	109	トノサマバッタ	50
アカハライモリ	88	クロゲンゴロウ	95	ナ ナガサキアゲハ	110
アカマツ	31	ケリ	41	ナズナ	113
アキアカネ	93	(ゲンゴロウフナ)	66	(ナツアカネ)	93
アサギマダラ	28	ゲンジボタル	73	ナニワトンボ	82
アブラコウモリ	97	コアジサシ	98	(ナミマイマイ)	30
アマサギ	39	コゲラ	100	ニイニイゼミ	22
イカルチドリ	60	(コサギ)	39	ニホンアマガエル	89
ウスバキトンボ	107	コナラ	34	ニホンイシガメ	78
エノキ	35	(ゴマダラチョウ幼虫)	29	ニホンヤモリ	106
エンマコオロギ	46	サ (サザンカ)	36	(ノギリ)	37
(オオスズメバチ)	126	サシバ	18	ハ (ハクセキレイ)	63
(オイカワ)	67	サワガニ	70	ハグロトンボ	72
オオオサムシ	24	シジユウカラ	102	(ハゼノキ)	126
オオカマキリ	45	シマドジョウ	68	(パン)	76
オオクワガタ	25	ジャンメチョウ	52	ヒガンバナ	56
オオゴキブリ	20	ジュンサイ	83	ヒグラシ	23
オオサンショウウオ	64	ショウジョウバカマ	37	ヒシ	86
オオセンチコガネ	26	スジエビ	69	(ヒツジグサ)	83
オオタカ	17	ススキ	58	ヒバリ	42
オムラサキ	29	スズメシ	47	(ヒメウラナミジャンメ)	52
オオヨシキリ	43	スズメ	104	ヒメボタル	27
オニバス	84	スマレ	114	ブナ	33
カ カイツブリ	76	(セアカゴケグモ)	126	(ブルーギル)	91
カクス	19	(セイヨウタンポポ)	115	マ (マイマイカブリ)	24
カジカガエル	65	(セグロアシナガバチ)	126	マシジミ	75
(カダヤシ)	92	(セグロセキレイ)	63	マツムシ	48
カネタタキ	108	セッカ	44	(マムシ)	126
カヤネズミ	38	タ タイコウチ	94	ミズウラビ	96
カワウ	77	(タゲリ)	41	(ミナミヌマエビ)	69
カフセミ	62	(タヒバリ)	42	ミンミンゼミ	21
カフニナ	74	タモロコ	91	ムクドリ	105
カフムツ	67	チガヤ	57	メジロ	103
カンサイタンポポ	115	(チャドクガ)	126	メダカ	92
キアゲハ	51	チュウシャクシギ	61	モウセンゴケ	85
キジ	40	チョウトンボ	81	モクズガニ	71
キジバト	99	ツバキ	36	モリアオガエル	79
キセキレイ	63	ツバメ	101	ヤ ヤマカガシ	87
キリギリス	49	ツブラジイ	32	ヨシ	59
ギンブナ	66	ツマグロヒョウモン	111	ワ フラビ	53
ギンヤンマ	80	ツリガネニンジン	55		
(クサガメ)	78	テン	16		
クサソテツ	54	(ドジョウ)	68		
クスノキ	112	トノサマガエル	90		
クチベニマイマイ	30				

この本は「生きものから見た大阪の自然」編集検討会の監修で作成しました。
検討会のメンバーは次の通りです。

朝日 稔：兵庫医科大学名誉教授、大阪府環境審議会 野生生物部会長
佐々木 勇：日本野鳥の会大阪支部副支部長
田中 正治：大阪府環境農林水産総合研究所 水生生物センター主任研究員
宮武 頼夫：関西大学非常勤講師、元大阪市立自然史博物館館長
村田 源：特定非営利活動法人 森林再生支援センター理事長
保田 淑郎：大阪府立大学名誉教授
和田 岳：大阪市立自然史博物館学芸員

(氏名五十音順、敬称略)

また次の方々には画像や情報の提供等でご協力頂きました。

相本篤志、乾風 肇、市川顕彦、稲垣猛史、宇都宮靖博、大久保健児、大阪府、
大阪府環境農林水産総合研究所水生生物センター、大阪府営箕面公園昆虫館、
岡本恭治、北村雅彦、北山 昭 (故人)、木村しのぶ、熊代直生、栗野孝志、
(財)大阪みどりのトラスト協会、佐々木 勇、佐々木祐二、佐藤 亮、清水良直、
下野誠之、庄子恭平、白木信生、瀬野直人、永井正身、西田浩志、福崎一彦、
前田武志、森 正人、八木立夫、安江正和、山上将史、山本 優

(氏名五十音順、敬称略)

「三菱UFJ環境財団」の概要

(財)三菱UFJ環境財団は、三菱UFJフィナンシャルグループの社会貢献活動および環境への取組みの一翼を担う財団として、環境の保全や自然・生活・文化環境の整備向上を目的に、前身の2財団(1971年設立のサンワみどり基金、1975年設立の東海財団)以来の伝統を受け継ぎ、以下の様々な活動を行っています。

1. 環境保全整備事業

◇植樹活動を支援～みどり豊かな森や街づくりを目指し、水源・河川流域、学校や公園等公共施設を対象に植樹をしています。

◇学校ビオトープづくりを支援～子供たちの環境学習の教材として活用してもらおうと、専門指導員のいる団体と提携し、生徒と先生、父兄、地域住民が協働してつくる学校ビオトープづくりを支援しています。

◇里山保全を支援～日本の文化と様々な生き物を育んできた、いわば心の原風景ともいうべき里山の保全活動を応援しています。

2. 環境教育事業

◇「みどりの絵」児童画コンクールの開催～すでに開催回数は31回を数え、毎年全国から約3万人の児童が応募してくれています。

◇大学向け寄附講座の開催～大学における環境教育の充実を目指して、平成6年より寄附講座「環境概論」

を5校で順次開設。現在は上智大学で開講しています。

◇啓発図書の発行～ポケットサイズの植物図鑑「樹の本」「続・樹の本」「野草の本」「花の本」「高山植物の本」や自然についての各種ガイドブックなど多数の啓発図書を発行し、ご希望の方に配布しています。

◇映画会「生きている地球の記録」の開催～毎年夏、名古屋市科学館でアースビジョン地球環境映像祭の入選作品を2日間にわたり無料上映しています。

3. 「水源の森」事業

首都圏の水瓶、利根川源流域にある群馬県みなかみ町藤原に、国の分収育林制度を活用して「水源の森」を確保。水源の涵養を図るとともに一般市民・児童を対象に自然観察会、林業体験などを年間10回ほど開催し、自然ふれあい楽習や保健休養の場として活用しています。毎年延べ約500名が参加されています。



「生きものから見た大阪の自然」
— 大阪の環境指標種 100 —

発行年月 平成 19 年 3 月
発行 財団法人 三菱UFJ環境財団
〒100-8114
東京都千代田区大手町 1 - 1 - 1
三菱東京UFJ銀行大手町ビル
電 話 03-3214-5553
URL:<http://www.h7.dion.ne.jp/~ufjef/>
監 修 「生きものから見た大阪の自然」編集検討会
編集協力 大阪府
編 集 環境科学株式会社